

大阪商業大学学術情報リポジトリ

暗越奈良街道と芭蕉 —

東大阪市における文化の論として、松原宿を中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2021-07-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 敏, ISHIGAMI, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/995

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



暗越奈良街道と芭蕉

— 東大阪市における文化の論として、松原宿を中心に —

石 上 敏

はじめに

「現在の大阪市域、東大阪市域に残る史跡を、写真を交えて歴史的側面からわかりやすく解説した」¹⁾ という『おおさか漫步』²⁾ は、大阪商業大学商業史博物館より平成7年（1995）に刊行され、翌々年には「文久元年刊行の『淀川兩岸一覽』をもとに、江戸時代の淀川の船旅を史跡にそって解説した」続編の『続おおさか漫步』³⁾ が刊行された。さらに平成12年（2000）に至って、「近鉄奈良線沿線の歴史を、近鉄開通に伴う地域の変遷を視点に、各駅ごとに解説した」『続々おおさか漫步』、同15年（2003）に『新おおさか漫步』が刊行されている⁴⁾。

『おおさか漫步』シリーズの中でも特に私が注意を引かれたのは、東大阪市域を扱った正編の11章以降であった。たとえば、奈良街道と芭蕉との関係である。該書14頁には、「明暦元年（1655）松原宿が整備され」として、現在の東大阪市内をほぼ東西に貫く暗越奈良街道を芭蕉が通ったという近世（江戸時代）前期の出来事が記されている⁵⁾。

明暦元年といえ、江戸開府から52年目である。翌々3年（1657）の1月18日から20日にかけて江戸市中の大半を焼き尽くした大火は、その直後から「振袖火事」^{ひのととり}「丁酉火事」、また「明暦の大火」などと呼ばれ、近世期を通じて最大の火災であったと言われてきた。そして、この大火の被害から復興する際に、江戸市中のインフラは劇的に改善された⁶⁾。

松原宿（「まつばらのしゅく」。また「まつばらしゅく」「まつばらじゅく」とも）は、江戸復興に象徴されるインフラ整備が続けられていた時期に、奈良（春日大社）から難波（玉造あるいは二軒茶屋）までの奈良街道における大坂側唯一の宿場として設置された⁷⁾。

その後、奈良（大和）と大坂（河内）の国境に当たる標高450メートル余りの暗越^{くらがり}峠には、松原宿に匹敵する軒数の茶屋が営まれるなど、この地域の経済的成長を支えた。そして、その後も現在の東大阪市域を含む中河内地域では、近世西日本最大の治水事業である元禄16＝宝永

元年（1704）の「川違え」（大和川付替え）に至るまで、大規模なインフラの整備が進められてゆく⁸⁾。

芭蕉の暗峠越えに対して、これまでも数多くの考察がなされてきた。以下に見るように、芭蕉が暗峠を詠み込んだ発句を残しているからである。しかし本稿では、ただ「文学」としての議論に終始することなく、地域学の視点から、芭蕉がかつての河内野、現在の東大阪市域を東西に貫く暗越奈良街道を通過して行った一件を、「文化」に主眼を置いて観察する。むしろそれは、この折に詠まれた芭蕉句を解釈する前段階の作業となるが、本稿で着目するのは、大坂（河内）側からは「奈良街道」（奈良みち）、奈良（大和）側からは「難波街道」（大坂みち）などと呼ばれてきた一本の街道である⁹⁾。

ここでは、大坂側の呼び方を採用して「暗越奈良街道」と呼んでおきたい。奈良からやってきた芭蕉の行路に即しても、本稿で述べる松原宿の所在に照らしても、また芭蕉句の「枯野」の仮定される位置に関しても、この呼称がそぐわしいと思われるからである¹⁰⁾。

1. 暗峠と奈良街道

1) 暗峠への上り坂

元禄7年（1694）、最晩年の芭蕉がこの奈良街道を通過したことは数々の証左があって動かない。ただし、その約1か月後に逝去した芭蕉は、この折の詳細を書き残さなかった。したがって、多くは周辺史料による推測によって述べられてきたし、本稿も同様である。ただ一点、この時点での芭蕉の健康状態から推して、この旅は、芭蕉にとってそれまでの旅とはかなり趣を違える旅であったと考えられる¹¹⁾。

旧暦9月9日の早朝に奈良を出立し、同日夜に大坂に到着してから、わずか1か月と3日後の10月12日に芭蕉は亡くなるのであり、すでに痼病の症状が出ていたと言われている。実際、この後約1か月の間に詠まれた句は多くはなく、書かれたものに至っては数通の書簡、それも多くは代筆が知られているに過ぎない¹²⁾。

そのような中で、芭蕉は9月9日の重陽の節句にちなむ発句をいくつか残している。しかし、それらの中には暗峠を越えたあと大坂（河内）側を詠んだものはない。そもそも、暗峠を詠み込んだ「菊の香にくらがり登る節句哉」という発句を除いて、芭蕉が奈良街道そのものを詠じた句は、これまで知られている限り存在しないのである¹³⁾。

9月9日の払暁に奈良（猿沢池畔）を出立し、生駒山の暗峠（標高455.8m）までが4里余り（約17km。九十九折りの山道を考慮に入れて実質約20km）。そこから、この街道の河内側唯一の宿場である松原宿までの距離が1里5町（約6km、同約7km）ほどである。さらに奈良街道との分岐点に当たる今里までが2里半（約10km）、目的地である高津^{こうづ}までを含めるならば、芭蕉はこの一日で約35km、山道を考慮に入れば40kmほどを移動したことになる。にもかかわらず、その後半の約20キロの間を詠んだ句は一句も存在しない。少なくとも、これまではそう言われてきた。

途中で馬に乗ったことも考えられるが、その可能性はさほど高くはない。後述の通りこの頃すでに松原には宿場の陣立てが整備されていた。ただし道中の運搬用に用意された馬は、記録に残る限り、わずかに2頭。奈良側の宿場（追分）は本陣であり、奈良寄りにも本陣があったとする記録もあるが詳細は不詳で¹⁴⁾、いずれも芭蕉の頃、よほどの非常時でもなければ一般の旅客が利用できたとは考えにくい。ただ、松原における駕籠の用意は史料に見当たらないが、たとえば『河内名所図会』（享和元（1800）年刊）には多くの駕籠が見えて、駕乗の可能性をうかがわせる。

当時の旅人が街道を歩く1日の平均距離は、ざっと10里（約40km）と言われている。しかし、この約1か月後に痢病で没することから考えても、芭蕉の体調がすでに相当悪化していたことは間違いなく、そのような体調を考えるにつけても、海拔455メートルという山越え道を含んだ約25キロを早朝に起きて移動して来た芭蕉が、この街道の河内側唯一の宿場であった松原宿で休息をとらなかったとは考えにくい。

100万年前とも60万年前とも言われる造山活動によって海（大阪）側から押されて形成された生駒山系は、西の海側は急峻な傾斜を呈しており、逆に東の内陸（奈良盆地）側は緩やかな斜面となっている¹⁵⁾。ただし、奈良側からこの山を越えようとするれば、生駒山系の東側一帯には標高200～300m程度（最高340m）の矢田丘陵^{やた}が広がっており、生駒山のかなり手前から坂を上り下りして進むことになる。出発地の猿沢の池が標高80mほどあるので、5kmほどは緩い下り道になるが、尼ヶ辻を超えたあたりから今度は緩やかな登り坂になり、標高100～200mの坂道を上り下りしつつ10kmほど進み、標高100mほどの高さに戻った後に、いよいよ生駒山への登り道となる。そして、標高455.8mの暗峠を越えたあとは、奈良側の3倍の傾斜とも言われる最大傾斜勾配30%以上の急坂を下らなければならない。ちなみに、急傾斜で知られる六甲山（表六甲）の平均勾配が9.1%、最大斜度が16%であるから、ほとんどその2倍に達している¹⁶⁾。

その急坂を標高差約400m下ると、その1km先に松原宿がある。芭蕉が通ったのは、この宿

場が出来てから40年にもならない頃のことであった。この後、芭蕉はほとんど平坦な街道を3里（約12km）ほど進み、今里で奈良街道と別れて、上町台地の坂を上りながら大坂への到着を実感したことだろう。そして目的地（洒堂邸^{しやどう}）のある高津へと急いだはずである。

2) 芭蕉の体調

芭蕉の体調が悪化していたことをうかがわせるのは、この年（元禄7年）4月に門人乙州^{おとくに}に宛てて書かれた書簡である。そこで芭蕉は、持病快復次第に帰郷する旨を伝えている。9月9日の暗峠越えは、それから5か月後に当たる。確かに一旦は小康を得たのであろうが、確実に病状は進行していた。

また、これ以前に体力の衰えを感じさせるのは、奥の細道の旅を終えた翌年（元禄3年）夏6月から7月末までの幻住庵居留中に書き始め、義仲寺滞在中の8月に完成した「幻住庵記」¹⁷⁾である。

予又市中をさる事十年計^{ばかり}にして、五十年や、ちかき身は、蓑虫のみのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽象潟の暑き日^{おもて}に面をこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂^{ただよふ}。鳩^{には}の浮巢^{ながれ}の流とゞまるべき蘆^{あし}の一本^{ひとと}の陰た^{のき}たのもしく、軒端^ば茨あらため、垣^{ゆいぞへ}ね結添^{はじめ}などして、卯月の初^{いり}いとかりそめに入し山の、やがて出^{いで}じとさへ思ひそみぬ。

現代語訳すれば、「私も市中を去って10年ほどになり、50歳にも近く老いた身体で、蓑虫が蓑をはずし、かたつむりが殻から抜け出るように、奥州象潟の灼熱の太陽に顔を焼き、歩きあぐねつつ砂丘を越えて日本海の荒磯に足を痛めながら、今年は琵琶湖のほとりを漂泊している。さまよい流れる鳩の浮き巢が一本の葦を頼りとするように、さっそく屋根を葺きかえ、垣根を結って築き、4月の初旬にふとしたことからこの山に入ることになったが、すぐに心底出発するのではなかった、ここに留まろうかとさえ思い始めた。」となる。「鳩」は鳩鳥^{におどり}、すなわち鵬鵬（カイツブリ）のことであり、水上に漂い浮かぶ巢をつくることから、はかない人生の営みに重ねて歌や句にも詠まれることが少なくなかった¹⁸⁾。

以下に続く部分は、繰り返し引用され、大変よく知られている一節である。

倩^{つらつら}年月^{うつり}の移こし拙^{とが}き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬^{ぶつり}祖室^{そしつ}の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を労して、暫く生涯^{ついで}のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。

「ここまで生きてきた拙い私のあやまちをよくよくかえりみるならば、ある時は仕官して生

計が立てられることを羨み、一度は仏門・禅門の戸を叩こうと思ったこともあったが、結局は道筋の知らない風雲に身を責め、花鳥風月に情けを傾けて、当分の間はこれ（俳諧）が生涯のなりわい事となったので、とうとう無能無才のまま、これ一筋の生涯となってしまった。」

ここに表出されたのは、もちろん『奥の細道』冒頭とも響き合う漂泊者の無常観であるが、しかしここには、芭蕉がかつて記したことの無い疲労感が滲み出ている。逝去4年前の文章であった¹⁹⁾。

暗越え前後の芭蕉は、奈良出立の際に複数の佳句を得、おそらくは暗峠で「菊の香に」の句を得たあと、没するまでの約1か月の間にはいくつかの句会に参加したりもしたのだが、その中に生駒山の河内側や河内平野を詠んだ句は知られていない。到着直後から長く寝込んだり、次第に病の重くなる時期ゆえのことであろう²⁰⁾。

この年4月に、芭蕉は江戸で生涯最長の紀行文『奥の細道』を完成させたあと、5月11日に曾良と次郎兵衛を伴って関西へと旅立った。そして、2週間余りのちの同月28日に伊賀上野の生家に到着している。この頃から体調不良をかこった芭蕉は、それを押して門人たちの招きに応じ、京都や湖南を周遊して多くの句会に参加している。再び故郷に戻ったのは7月のこと。この間、江戸では芭蕉と内縁関係にあった寿貞尼が死去し、6月8日にその報を受けた。次郎兵衛は寿貞尼との間の子であり、この報は芭蕉にとって大きな精神的打撃になったと思われる²¹⁾。

しかし、この後も各地の門人たちからの来訪希望があつて、中でも酒堂と之道^{しどう}という二人の門人の仲裁が先決と考えた芭蕉は、次の訪問地を大坂と定めたのである。

3) 重陽^{ちょうよう}の節句

故郷伊賀上野に2か月滞在したあとの9月8日の旅立ちは、重陽の日の山越えを意図したのであろう。この日、高い所に登ると長寿を保てるという言い伝えがあつた²²⁾。

芭蕉は付き人たちを従えて（むしろ扶助されて）伊賀上野を発ち、奈良を経て尼ヶ辻・追分を過ぎて矢田丘陵^{むろのき}にかかり、最初の難所といえる標高270mの桧木峠^{おぜ}を越えた。そして小瀬から生駒山を登って暗峠に至ったはずである。そこから急坂を下って河内平野に降り、松原宿を通る前後から「河内」という名称の由来ともなった旧大和川水系の幾本もの川を越えて、奈良街道を西へと進んだ。そして、編笠で有名な深江を過ぎて大坂へと到ったのである²³⁾。この一日が、旅に生き旅に殉じた芭蕉の、じつに最後の旅の最後の一日となった。

この後、芭蕉はいくつかの句会や遊山に出かける。ただし、それらは近場への移動であつて、

中でも最長は、片道7km（洒堂邸からの出発と考える）ほどの住吉大社詣だったと思われる。到着4日後に当たる9月13日のことであった。しかし、そこで芭蕉は体調を崩し、その晩の畦止邸での句会を欠席している。9月26日の句会是有名な料亭浮瀬（晴々亭）で開かれたので場所がわかるが、この頃には、すでに之道邸から出発したものであろう。

その翌日27日の園女宅へも同様であろうが、畦止邸の場所がわからない。之道の家は、洒堂の家よりも奈良街道からは離れていた道修町で、（仲裁の順や親疎もあって一概には言えないが、近ければそちらを先に訪れた可能性が高い）、その後の句会の場所から考えて、高津より南、あるいは西に当たる可能性が高い。13日に住吉へ立ち寄ったのは、そのあと句会が予定されていた畦止邸が近かったからと思われる。

園女の家は北浜にあり、墓は太融寺（現・北区太融寺町）にある。その他9月13日、28日に（後者は芭蕉最後の）句会が開かれた畦止邸、19日の其柳邸、21日に病状が悪化して1泊した車要邸も場所がわからないが、いずれも大坂三郷（市街地）か近在であったと思われる。これらの中でも、往復14kmほどの住吉詣が最長であったと思われるが、これを旅と称するには当たるまい。

すでに険峻な山道を何度も体験してきたとはいえ、この折の芭蕉にとっては難儀な山登りであったと思われる。暗峠を越えてから河内への下り道は上りの倍以上の勾配があり、疲労した足での下り道には、いかばかり難渋したことだろうか。芭蕉が暗峠の茶屋で休息したとしても、松原宿であらためて休息をとったと考えるゆえんである。

暗越奈良街道は、奈良と大坂を結ぶ街道の中でも、8里8町（約32km）と言われる最短路であったが、標高455mの暗峠越えという労苦が付随した。「くらがり」の語源には「椋ヶ嶺」（くらがね）や「鞍返し」（くらがえし）など諸説があるが、「暗い峠」説が妥当であろう。芭蕉の時代にも「昼なお暗い」状態であることに間違いはなかった²⁴⁾。

芭蕉一行は、その日の日没後に高津の洒堂宅に到着した。そして芭蕉はそのまま仰臥し、連日の高熱と悪寒に苦しむことになる。ただし、その後に無理を押して俳諧の座に出向いている。中でも著名なのは、9月27日に北浜の園女亭で歌仙を巻いた折の発句「しら菊の目に立てゝ見る塵もなし」であろう。翌28日には2週間前に句会を欠席した畦止宅で再度の句会があり、これが最後の句会となった。九月晦日の29日に予定されていた芝柏邸の句会には欠席し、「秋深し隣は何をする人ぞ」の句を寄せている。到着からちょうど20日目のことであった。そして、この日を区切りとするかのように、以後は亡くなるまで句会には加わっていない。

29日夜から病状が悪化した芭蕉は、10月5日に至って、之道宅から、南久太郎町南御堂前の

花屋仁左衛門の離れ座敷へと移る。すでに病は重く、それからちょうど1週間後に当たる同月12日、同所で没した。近代には大阪の大動脈となった新御堂筋の道路上に当たり、現在は道路脇に芭蕉逝去の地であることを知らせる碑が建っている。

9月9日には洒堂邸に投宿し、3日後の12日に洒堂と之道の手打ちの会があって、10月5日に之道邸を退去という26日の間、芭蕉は両者に偏りのないように滞在したというのだが²⁵⁾、その内訳（それぞれの泊数）はわからない。ただ、芭蕉逝去の折に洒堂が駆け付けていないことが指摘され、それは彼がすでに吟行に旅立っていたからと言われてきた。そうであれば、おそらく芭蕉が之道邸に移ってすぐに旅立ったかと推定されるので、9月9日から21日までの13日間を洒堂邸、9月21日から10月5日までの13日間を之道邸で過ごしたと考えておく。その中間に当たる9月21日には、芭蕉は半歌仙を巻いた車要邸に宿泊しており、そこから洒堂邸には帰らず、之道邸に移ったものと考えておきたい。あるいは、これほど長く寝込むとは芭蕉自身も予想していなかっただろうから、もう少し早く之道邸に移ったものかとも思われる。

そして、車要邸での1泊を含めて大坂で26日間を過ごした芭蕉は、10月5日に南御堂前の花屋仁左衛門の貸座敷へと病床を移すことになる²⁶⁾。「旅に病て夢は枯野をかけ廻」²⁷⁾の発句は、逝去の4日前、10月8日に病床で吟じた句とされている²⁸⁾。芭蕉没後約150年の天保期には、大坂の俳人連中によって句碑となった。現在その句碑は、南御堂の獅子吼園内にある。

このように、伊賀上野に在った5月末以来、すでに芭蕉が体力的に衰弱していたというのは通説であり、裏付けもとれる。にもかかわらず大坂行きを決めたのは、門人同士の諍いを仲裁する目的があったからである。残念なことに、伊賀から奈良を経て大坂までの道程について、前述の通り芭蕉自身は何も書き残していない。芭蕉本人はもちろんのこと、同行者たちにせよ、大坂到着の直後から高熱と悪寒で寝込んでしまった芭蕉への気遣いと看病で、それどころではなかったのだろう²⁹⁾。

ところで（これまでに言われたこともなく、今のところ仮説ではあるが）、芭蕉が10月8日の夜、すなわち9月8日の伊賀上野出立から1か月後に示したとされる病中吟「旅に病て夢は枯野をかけ廻」について、私には思うところがある。

翌9日、芭蕉は門人の支考を呼んで、かつて嵯峨で得た「大井川浪に塵なし夏の月」を改変したい旨を告げた。改案として示したのは「清滝や波に散り込む青松葉」である。しかし、芭蕉最後の句としては、「旅に病んで」が挙げられることがほとんどである。また、「枯野」とは、従来具体的にどこの「枯野」であるかを云々されることがなく、同じく「旅」もまた抽象的なものとして扱われることがほとんどだった。

それは、ひとつには「夢」という抽象語に誘われてのことであっただろう。しかし、そのようなことがあるだろうか。芭蕉は、一貫して土地への挨拶を重視した俳諧師である。むしろ、その俳諧の最大の特徴が、土地への挨拶であったと言ってもよい。そのような芭蕉が、いくら病中吟であり、仮に辞世の句であったとしても（私はそうは考えないが）、どこでもない抽象的な場所を詠むということが、はたしてあり得たであろうか³⁰⁾。

私はこの「枯野」が、具体的に暗越奈良街道沿いの「枯野」、旧暦9月9日（グレゴリオ暦＝新暦では1694年10月27日）の「枯野」すなわち河内野のことであったと考えている³¹⁾。ただし、本稿ではそのことを十分に述べる紙幅の余裕がないので、発句の解釈は別稿に譲り、以下は歴史地理的な考察へと目を転じたい。

2. 松原宿

1) 位置

現在の松原に、かつての宿場としての面影を見ることは簡単ではない。かつての街道筋を物語るジグザグな道筋のほかに、古い道標と新しい案内碑が残されている程度である。10年ほど前まで唯一残っていた萱葺屋根の家は、残念ながら姿を消した³²⁾。

近代に至り、奈良街道の多くの道程は、生駒山麓の金属加工業と大阪港を結んで敷設された新道路、通称「産業道路」に吸収された³³⁾。しかし、それでも松原宿に近いかつての街道筋は非直線的であったために産業道路に吸収されず、現在もお明瞭な形で残っている。そこから産業道路と付かず離れず東西に続く街道の道筋には、地蔵や地神・道祖神、あるいは古くからの面影をわずかに残す家々や、街道を行き交う人々を見守ったであろう古樹や竹藪などが残り、街道は今でも「生き続けている」と言えるだろう。

暗越奈良街道のなかでも、とりわけ松原宿の道筋は独特であり、上空から見れば、あたかも階段のように段々になった道が、生駒側から大阪側にかけて階段を降りるような形で続いている。その街道の周辺の姿は、ここ100年ほどの間に当然大きな変化を遂げてきたが、それでもなお道筋に沿って往時の面影をとどめていると言ってよい。

図1として、宿場と街道の様子が比較的に残っている明治期の地図を掲げておきたい。街道の中に薄く施した点線の部分が奈良街道の道筋である³⁴⁾。

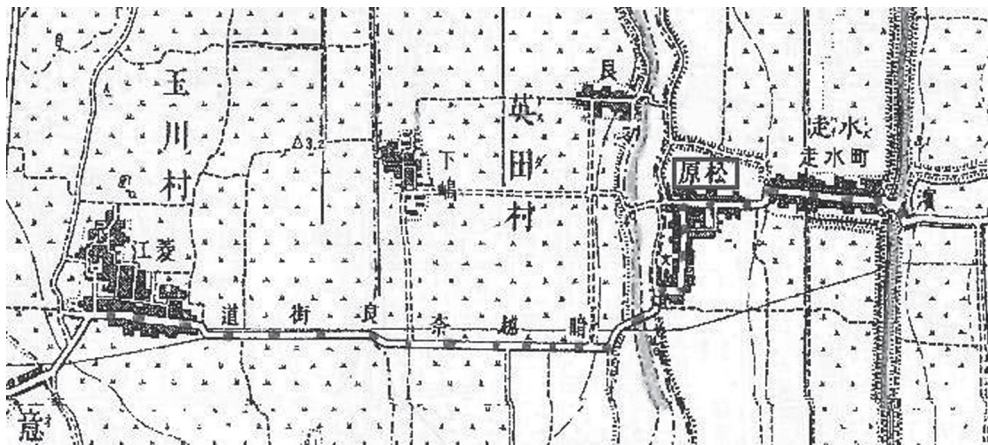


図1

(B)

(A)

旧街道の北側一帯には、「英田^{あかだ}」と呼ばれる田圃が広がっており、さらに北には今米^{いまこめ}・川田・加納、南には吉田や稲葉と、いずれもこの一帯が生産性の高い水田地帯であったことを物語る地名が残り、現在も地名表示として用いられている。その一方で、玉川・菱江・箕輪^{みずはい}・水走と、この地域を潤す水系との深いかかわりが地名にも現存している。意岐部^{おきべ}は海民として著名な息長^{おきなが}氏とのかかわりが指摘されることもあり³⁵⁾、菱江の他にも、水走の東に浜、英田と玉川の間に下嶋と、かつてこの地が海（潟・湖）であった頃の面影を残す集落が営まれていた。

芭蕉は、松原宿の手前で恩智川（A）を、そして直後に吉田川（B）を渡り、さらに菱江川（玉川）・楠根川・長瀬川（久宝寺川）・平野川（渋川）と何本もの川を橋と渡し船で次々に渡って、目的地の高津まで進んで行ったのである³⁶⁾。

松原の南側一帯は、大正3年（1914）に大阪電気軌道（大軌）が敷設されて以来、はやくから住宅や工場が建ち並び、その分、大規模な開発からは逃れてきた。宿場周辺の松原1丁目・2丁目（かつての英田村）は街道の北側に当たり³⁷⁾、こちら側は東大阪市（旧河内市）の中でも郊外と呼ぶべき場所として、比較的近年に至るまで田畑が広がっていた。そのため、むしろ近年に至って大規模な開発の対象とされている。

旧松原宿を中心とした松原1、2丁目（東西幅約700m）の向かい側（産業道路の南側）には、かつての大軌用地に建設された花園ラグビー場を中心とする花園中央公園（旧花園競馬場、旧大阪外国語大学グラウンドなど。36万㎡）と花園検車区（花園車庫。6.5万㎡）が大きく広がっており、ここには住宅建設ができない分、特に高度経済成長期のあとから周辺一帯に宅地開発の波が押し寄せた³⁸⁾。

2) 沿革

平安時代以来の豪族・水走氏の名を残す水走の浄栄寺から西進すれば、南へと降りてゆく段々の部分が松原村の集落であり、現在の英田北小学校の東沿いに、17世紀半ば（松原宿が整備された頃）には16軒の旅籠があったとされている³⁹⁾。

松原宿が歴史に登場するのは慶長17年（1612）、豊臣方の片桐且元が茨木城への入城の際に、松原で護送隊と別れたと記録される（『太閤記』など）。元和元年（1615）には徳川の直轄地（天領）となって代官が置かれた。

その後、旅籠は大和屋など14軒、茶屋は河内屋など9軒へと推移したが、幕末の伊勢参りの頃には正式な旅籠だけでは到底間に合わず、周辺の一般民家（農家）まで現代の民泊のように簡易な宿になったものと思われる。最短距離で奈良に達するこの街道には、お伊勢参りの旅衆が詰めかけたと伝えられており、伊勢参宮街道のひとつにも数えられている⁴⁰⁾。

松原宿の成立当時、当初は大坂町奉行によって松原村・水走村の2村が宿場の運営を命じられた。その後約15年を経て、寛文11年（1671）に生駒西麓の豊浦村・額田村が加わった。芭蕉の来訪まで23年の頃のことである。2村では負担が大きすぎたからであろう。これらが松原と同じく幕府直轄領（天領）であったことも、指名の要因となったであろうか⁴¹⁾。

しかし、豊浦といえば宿場から半里ほども東（山側）に離れており、額田はさらにその北側にある。枚岡神社の西面（河内平野側）に位置する豊浦から、山根際（山裾）道を通して額田までは標高約45～50mの景勝地であり、かつての東高野街道の沿線に開けた地域である。のちに、やや北側に別荘地が営まれることが示すように、経済的に恵まれた層の居住する場であった⁴²⁾。しかし、松原村からそこまで行く間にはいくつもの村があり、両村にしてみれば負担感は大きかったことだろう。それ以後、この4ヶ村が半月交替などで宿場の仕事を負担することになる。ただし、実際には、宿仕事には専門の間屋が当たり、人足は宿場（駅所）の村方より雇った。このように、芭蕉が松原宿を通った元禄7年には、4ヶ村体制で運営されていた。

松原宿の規模は、かなり後（4ヶ村の体制になってから120年後、芭蕉来訪から100年後）の史料になるが、寛政6年（1794）の時点で番馬2疋、人足10人という陣容だった⁴³⁾。ちなみに東海道の一般的な宿場では馬100疋・人足100人、中山道では50疋・50人、奥州・甲州・日光の3街道では25疋・25人である。これら五街道の規模に比べれば、脇往還とはいえ馬2疋・人足10人というのはわずかな数であり、馬の利用者が圧倒的に少なかったことを示唆する⁴⁴⁾。芭蕉の頃には、さらに小規模だった可能性すらある。

松原宿について、御厨村加藤家文書（大阪商業大学商業史博物館所蔵）には「駅所願一件」

を収める⁴⁵⁾。江戸中期、芭蕉が同宿をってから約100年後の天明6年(1786)における賃金増額を求めた願書である。それによれば、本馬1疋で奈良から松原宿までの5里5町が317文、同じく松原宿から大坂までの3里が123文である。もし奈良から大坂(玉造であろう)までを本馬で通したならば440文(現在の貨幣価値で1万円前後)になる。運賃が距離割でないのは、山越えに割増の料金がかかるためであろう。

ただし、「本馬^{ほんま}」とは「江戸時代、宿場に置いた駄馬の一」であり、「一駄として定められていた積荷量は40貫(約150キロ)または36貫(約135キロ)」で⁴⁶⁾、本来は荷役用の馬である。「駄馬」とは荷物運搬用馬の総称であり、乗馬用の馬に対してこのように呼んだ。「駅」とは、「うまや」という訓読みの通り、本来「馬を停める場所」の意であり、その意味で東大阪市域における史上最初の「駅」が松原であった。ちなみに、2020年現在の鉄道駅は27(布施は近鉄奈良線と大阪線が重複)、バス停留所はおよそ100を数える。

宿場には、他に「軽尻^{かるしり}」「空尻^{からしり}」と呼ばれる乗馬用の馬が置かれ、荷物用に使う場合には本馬の半分(20貫)まで積載することができた。このため積載量一杯に載せることのできる馬を「もとの(基準となる)」「正式の」という意味で「本馬」と呼んだのであろう⁴⁷⁾。ただし、松原宿に軽尻(空尻)が何頭いたのか、そもそもいたのかいなかったのかすら、管見に入る史料からは確認できない。

寛文11年(1671)以来、4ヶ村体制で維持されて来た松原宿であるが、それから110年余り経った天明3年(1783)には、河内郡吉田村、若江郡菱江村^{ひしえ}・御厨村^{みくりや}・岩田村^{いわだ}・高井田村^{たかいだ}の5村が助郷として加わった(図2参照)。吉田村は松原の南西一帯を占める大きな村で、豊浦・額田両村よりも松原宿に近い。交通量の増大に伴って、従来の4ヶ村では負担の維持が困難になったものと考えられる。また、新しく加わった5村は産業(農業主体)の面で生産力を高め、経済規模や人口も増加していた区域と判断できる。この折に新しく加わった5村で、御用人馬(人足や貸馬)と諸入用銀(諸費用)の半分近く(46%)を負担したという。

さらに、それから約40年後の文政5年(1822)には、河内郡から日下^{くさか}・上之島^{かみのしま}・福万寺^{ふくまんじ}・市場^{いちば}・新家^{しんけ}・六万寺^{ろくまんじ}、若江郡から荒本^{あらもと}・横枕^{なぐさ}・新家^{しんけ}・長田^{ながた}・川俣^{かわま}・西堤^{さいでい}・稲田^{いなで}の計13ヶ村が加わった。ただし若江郡の7村はのちに離脱。この頃になると、公儀の決定に反して労役を離脱することもありえたのであろうか。それも、同時期に加わった河内郡5ヶ村が引き続き助郷の役にとどまったのに対して、若江郡7村だけが離脱しているのは、どのような理由によるものか。それほど、この頃の幕府の統制は弱まっていたというのか、あるいは何か訴訟のような動きがあったのだろうか⁴⁸⁾。ともあれ、従来の9村と合わせて、ここにはほぼ現在の東大阪市に相当する区

域が形成されたことになる。図2として、江戸時代以来の地名をよく踏襲する現在の東大阪市の町名地図を掲げておきたい⁴⁹⁾。

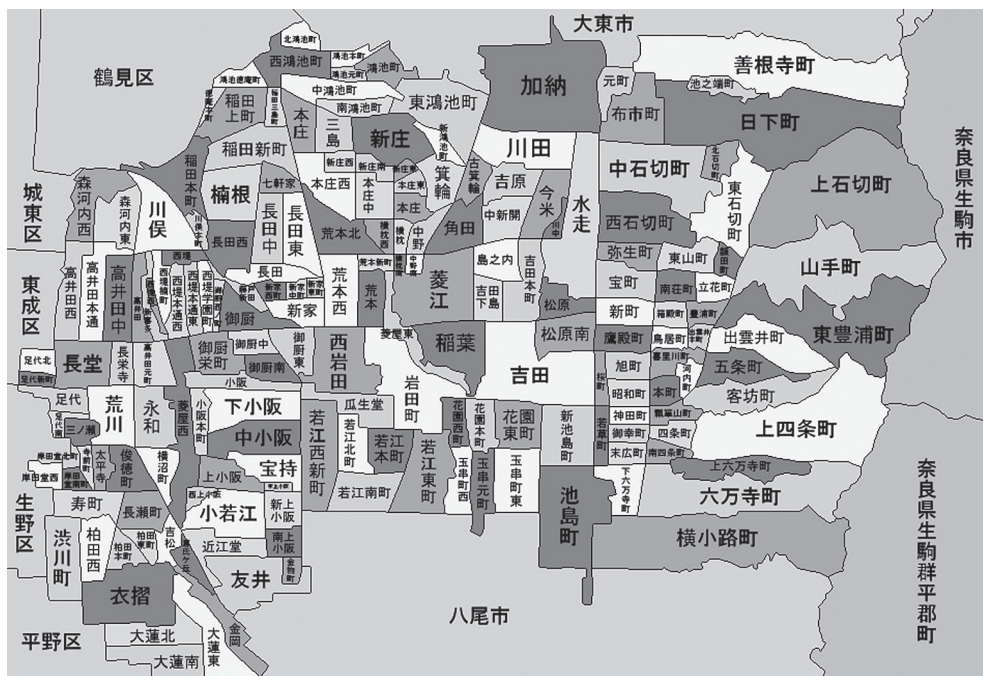


図2

そして、慶応4年（1868年。同年中の9月8日に明治に改元）に至って、若江郡の7ヶ村が復帰した。しかし、慶応から明治への改元が周知の通り江戸時代最後の改元となり、本来は参勤交代の制度化に即して構築された宿駅制度も瓦解した⁵⁰⁾。

その慶応4年の時点では、石高100石につき年5人宛の人足負担となっていた。この負担が長年続いてきたものであれば、当初からの4ヶ村、天明3年に加わった5ヶ村、そして文政5年追加の河内郡6ヶ村・若江郡7ヶ村を合計した石高の、およそ4分の1ということになる。負担全体は寛政6年（1794）時点と比べて、ほぼ倍加したことになるが、単純に村数で割れば、1村当たりの負担は大きく減少している。もちろん、そのための「助郷」であろう。

村数の漸増傾向は、19世紀に入って街道の往来が盛んになったことを意味しているだろう。先にも述べた「伊勢参り」に象徴される民衆の大移動が、幕末に至るに連れて高まりを見せたのである。松原宿に現存する道標に「右 なら いせ 道」（「なら」と「いせ」は並書）「左 大坂道」と刻されている通り、暗越奈良街道は、幕末には実質的に伊勢参宮街道であった。

ところで、従来の9ヶ村に、文政5年に13ヶ村を合わせた範囲は（一部が八尾市域に入るものの）、先述の通り、現在の東大阪市の市域とほぼ一致する。そもそも、現在の東大阪市域は、東がかつての河内郡、西がかつての若江郡の南部を除いた地域から大半が成り立っており、そのほぼ中央、やや東寄りに旧松原宿（現在の花園中央公園北）があった。

昭和42年（1967）の3市合併による東大阪市政施行は、合併合意までの経緯を見ると⁵¹⁾、北の大東市や南の八尾市が一時は合併構想に加わり、逆に合併3市の中でも枚岡市との交渉が最も難航した。それゆえ、あえて言って3市合併（東大阪市の市域策定）は「偶然」の要素も大きかった。それでも、文政5年（1822）に浮上していた助郷を含めての範囲は、いわば市制施行から145年前の「（未来の）東大阪市」の最初の市域形成の基盤であったと言えるかもしれない。言い換えれば、宿場である松原を中心に、そこへの関与を定められた22ヶ村または20ヶ村によって、はからずも「原・東大阪市」と呼べる地域が生まれていたのである⁵²⁾。

3) 通行人

奈良街道をゆく元禄7年（1694）の芭蕉は、かつて東海道でそうしたように、馬に乗ったであろうか。現存史料の範囲からは不明であるが、既述のようにその確率は低かった。しかし、もし馬に乗ったとしても支度の間は宿で休んだであろうし、そうでなくとも当時10軒ほどあった松原宿の茶屋で休んだと考えてよいのではないか。

近世後期（享和元年、1801）に刊行された絵入り地誌・名所絵本『河内名所図会』を見れば、全6冊の中に描かれる牛が18図20頭に達しているのに対して、千早城合戦・四条縄手合戦・^{これ}惟高親王図などの歴史絵を除いて、馬は5頭が描かれるにすぎない。同図会には社寺や参詣道、あるいは山道が描かれることが多いことを考慮に入れても、ほかならぬ暗峠（^{たか}棕嶺峠）の絵に描かれるのが牛であることが象徴するように、奈良街道を行き来する馬はさほど多くなかったと考えられる。

これに対して、『河内名所図会』の「棕嶺峠（暗峠）」も、「奈良街道」の絵にも駕籠が描かれている。図会全体でも馬より駕籠の絵が多く、街道筋には少なからぬ数の駕籠が往還していたことをうかがわせる。

芭蕉は、この年（元禄7年）5月16日付曾良宛書簡に、「はこね雨難儀、下りも荷物を駕籠に付けて乗候」と記しており、箱根で駕籠に乗ったことがわかる⁵³⁾。この旅の門出にも、「麦の穂を便りにつかむ別れかな」の前書きに「駕籠の中より離別とて扇を見れば」と記しており（『^{む っ ちどり}陸奥衡』）、この頃の芭蕉にとって、駕籠での移動が頻繁であったことを知る。遡れば、5

年前の元禄2年に「山城へ井出の駕籠借る時雨哉」があり、46歳の年に当たる。井出（現・京都府田辺市井手町）も、まさに山背古道の起点であった。

いずれにせよ、暗峠から高津までは約2里半（10km程）なので、暗峠の茶屋で休息していたならば、下り道の勢いのまま大坂まで先を急いだ可能性も考えられる。駕籠であればなおさらであろう。実際、目的地を目の前にして日が沈んだことが同行者の記録から知られており、芭蕉たち一行はまさに沈みつつある夕日に向かって進んでいた。当日の天気は、この日のことを詠んだ芭蕉の発句を見る限り雨天ではなかったはずであり、旧暦9月上旬（新暦10月下旬）という季節から考えても好天であった可能性が高い。

出立前の奈良で佳句を得た芭蕉は、9月9日の重陽（菊の節句）という時節と、生駒山の暗峠という場所への挨拶⁵⁴⁾として「菊の香にくらがり登る節句哉」の句を詠んだ。それから没するまでの1ヶ月余りの間に、前述の通り何度か句会に臨んでいるのだが、明らかに河内を詠んだ句は知られていない。

以下は強弁に類するおそれがあるが、芭蕉がその人生の最期に詠んだという「旅に病て夢は枯野をかけ廻」の句に見える「枯野」が、仮に具体的なひとつの場所を指しているのであれば（抽象的あるいは包括的な風景でないのであれば）、ここまで述べてきたように芭蕉の旅の最後の日となった奈良から大坂までの間に見た「河内野」の光景が、それであった可能性が考えられてよい。むしろ、「旅に病む」というのが元禄7年の9月から10月にかけての現実的な芭蕉の日常であれば、確かに「夢」という抽象的な言葉が主体となる句ではあるものの、芭蕉が旅に病む具体的かつ直接のきっかけをなした奈良から河内・大坂までの景色の中に「枯野」の位置を定めることも、あながち的外れな議論とは言えないだろう。

そもそも、この発句のみを例外とすることに（確かにそれは結果的に辞世の位置を占めたのであるから、例外的で特別な句となったのであるけれども）、どれほどの意味と裏付けの強さがあるだろうか。この句は「辞世」とされることで特別な扱いを受けてきたのだが、「辞世」というのは、あくまでも後世の付会に過ぎないのである⁵⁵⁾。

松原宿から生駒山に向けて東進し、すぐに（約1km）至る箱殿（現・箱殿東）の辻（暗峠まで1里）は、生駒西麓を南北に結ぶ東高野街道との交点である。それは、かつて生駒西麓まで大きく入り込んだ海（草香江・河内湾）に沿ってつけられた、大阪・河内平野で最も早く通された道のひとつでもあった⁵⁶⁾。

箱殿から北へと道を取り、「京みち」の別称もある東高野街道を一路京都へと向かう人たちは少なくなかった⁵⁷⁾。逆に、南へと下って柏原から羽曳野・富田林、そして河内長野で西高野

街道と合流して高野街道となった道を高野山へ、さらには熊野へと向かう人々もいた。幕末の志士の一人に数えられる天誅組最年長の歌人伴 林 光平は、文政5年(1822)に新たに助郷となった河内郡市場村の歌人岩崎義隆の邸に頻りに通って、互いに和歌の技量を高め合った⁵⁸⁾。また、同じく文政5年に加えられながら、すぐに離脱した若江郡7村のひとつ川俣村にある「治水の父」中甚兵衛の生家・川中家にも、光平は何度も立ち寄った形跡がある⁵⁹⁾。ここは東高野街道から、ほんの少し西側にはずれた場所にあった。

近世期を通じて物流の大半を担ったのは水路を行き交う川舟であった。しかし、街道が次第に整備されるに連れて陸路を往還する人たちも増加していった社会事情が伝わってくる。先掲の『河内名所図会』を見ても、水路より陸路を利用している人のほうが断然人数が多い。伊勢参りなども、ほとんどの人、ほとんどの旅程が陸路であったことを想起する。水路と陸路に分かれて参拝し、両者が口喧嘩(振り売り喧嘩)を楽しむという独特な参詣で知られていた野崎観音(慈眼寺)の図には、三艘の川舟(剣先舟・屋形舟)に約30人、徳庵堤^{とっかん}と呼ばれる川沿いの土手に40人近くの参拝客が見える。もちろん絵図のことであるし、遠景の屋形舟は小さすぎて乗客が見えないので、もっと多くの舟客が描かれているはずなのだが、一定の参考にはなる⁶⁰⁾。

17世紀の芭蕉と19世紀の光平とが見た奈良街道の姿は、たとえ同じ街道筋ではあっても、また、松原という宿場に対象を限っても、大きな変化を蒙っていた。たとえば芭蕉は大和川の川違え(付替え)以前の街道を、光平は付替えられてから150年たった街道を見ていた。同じ奈良街道ではあっても、それらは天と地ほどにも異なる風景であった。なぜならば、大和川付替え以前と以後とでは、河内の名の由来ともなったこの地域(のちの中河内)の姿そのものが、完全に異なるものとなっていたからである⁶¹⁾。

芭蕉や光平のほかにも、この道を通って行った人たちは当然のことながらおびただしく存在した⁶²⁾。そこには森文雄(生駒山人)や吉田思玄のようにこの地域で暮らし、この街道を生活道路として使っていた人たちがおり、さらには学僧慈雲(葛城山人)のように生駒山の双龍庵と旧布施市域の長栄寺を往還した人もいた。これらの人々を加えることで、この街道の「街道史」が充実し、このエリアの魅力はより高まるだろう。

とりわけ、松尾芭蕉がこの街道を通って行ったという事実は、この地域にかかわる少なからぬ人たちに、特別の感慨を喚起する出来事であった。その象徴的な遺跡が、松原宿に建てられ、現在吉田墓地に移されているという「芭蕉」の石碑であり、生駒山の山麓に建てられた2基の芭蕉句「菊の香にくらがり登る節句哉」の句碑である。「くらがり登る」とは、見てきたように難儀して越えた生駒山^{くらがりとうげ}の 暗 峠を詠み込んだ芭蕉の「土地への挨拶」であった。

本稿では、松原宿を中心に見て来たが、この街道を考える場合、奈良側での追分や砂茶屋、大坂側の深江や玉造の二軒茶屋などを考える必要がある⁶³⁾。ただし、本稿では続けて暗峠を考察する。なぜならば、暗越奈良街道沿線（現・東大阪市、大阪市東部）の人々の間では、芭蕉は暗峠とともに想起され、語られることが最も多かったからである。

3. 暗峠

先掲の図2では、松原と南松原の間に奈良街道が通っており、新町から箱殿・豊浦を経て、東豊浦を登り切った所（奈良との県境）が暗峠である。芭蕉の行路に合わせて暗峠を起点にとれば、暗峠からの山越え道を下ると、生駒の山裾には枚岡（平岡）神社が鎮座する⁶⁴⁾。図2の町名でいえば出雲井町が40町歩（12万坪）あったというかつての枚岡神社の境内にほぼ相当するが、現在の社域は往時の約6分の1となっている⁶⁵⁾。

『延喜式』（927年）巻9、10の「神名帳」に載る、いわゆる式内社であり、社格は官幣大社。そして同書巻3の「名神祭」にも掲載される名神大社である。中臣氏の氏神として知られ、藤原氏が春日大社を興した際には、4祭神のうち天児屋根命・比売御神の2神を勧請・分祀している。そのため、「元春日」とも呼ばれてきた。藤原氏の栄耀とともに栄華を極め、社格も正一位勲三等の最上位に至って、『続日本後記』（869年）では「平岡大神社」と呼ばれている。

平安時代末期に河内国の一宮となり、中世以来、豪族の水走氏が神主を務めた。水走氏への織田信長の襲撃で本殿等を焼失したが、豊臣秀頼によって再建されるなど戦国時代をくぐり抜け、江戸時代にも河内一宮として多くの参詣者を集めてきた。本来の芭蕉であれば当然訪れていてよい場所ではあるが、見てきたような事情、とりわけこの折の体調不良に照らすならば、芭蕉はここに立ち寄ることはせず先を急いだことであろう。

枚岡から高津まではおよそ3里半（約14キロ）、健脚の芭蕉であれば、1日の平均的行程の3分の1から4分の1程度の距離である。しかし、すでに奈良（猿沢池畔）から枚岡まで、標高455.8mという暗峠越えを含めて直線距離6里弱（約23キロ）を移動してきた芭蕉であるから、ここでも休みたかったと思われる。しかし、奈良街道は枚岡神社の北辺に沿って境内の北側を通り、一之鳥居から社殿までの「松の馬場」と呼ばれる参詣道は、広い境内の南側を通っていた（図3参照）⁶⁶⁾。東高野街道に面した一之鳥居から門前に至る参道には出店も多く集まっていたが、奈良街道からはやや遠回りになり、芭蕉はここでは休憩しなかったと思われる。



図3

暗峠より東（奈良盆地側）には、追分に大和郡山藩の本陣があり、さらに東側（奈良側）にも本陣があったと伝えられる。河内側にも、大和郡山藩の宿泊・休憩所になったと伝えられる植田家がある。しかし、いずれにしても一般の通行者には縁遠い場所であった。ただ、尼ヶ辻から生駒山系への勾配が始まる辺りに、現在も砂茶屋という地名を残す休み処があった。かつて、神武東征の故事から「鷄^{とびの}邑」とも「鳥^{とり}見」とも呼んだという富雄（登美）の内である⁶⁷⁾。

ここは暗峠と同じく民間の茶屋があった場所で、松原宿のような幕府公認の宿場ではない。猿沢池畔からは2里半（約10km）弱の地点であり、ここから松原宿までも同じく約10kmの直線距離である。そして、松原から高津までが約12km。翌日から断続的に寝込んでしまうほど体調の悪い芭蕉であるから、これら3か所のすべてで休んだとしても不思議ではない。ただし芭蕉の発句には、結果的に暗峠のみが詠まれ、砂茶屋も松原宿も詠まれていない。

ところで、奈良街道の道中を考えると、もうひとつ考慮すべきことがある。それは芭蕉がこの地を通過した元禄7年（1694）とは、この地域の姿を決定的に変えた旧大和川の流路変更、いわゆる「川^{たが}違え」（付替え）のちょうど10年前だったということである⁶⁸⁾。

つまり、暗峠を越えてから、芭蕉は奈良街道の通る河内平野を南から北へと流れていた幾筋もの河川（いずれも旧大和川水系）を渡ったことになる。東（生駒山麓）から順に、恩智川・吉田川・菱江川・楠根川・長瀬川・平野川の6本である。奈良街道の位置で川幅200mほどあった長瀬川が最大で、あとは100m級の吉田川と菱江川、そして数10mほどの菱江川・楠根川・平野川である⁶⁹⁾。

東海道にしても、これほど次々に河川を渡って進む場所は、決して多くはない。新暦に換算して10月末のことであるから、水量はさほど多くはなく、天候も悪天であった形跡はないので、

おそらくは秋晴れの空の下を、長くとも200mほど、短いものでは数10mの距離を何度か舟で渡って進んだことだろう。芭蕉にとって、むしろそれは徒歩の疲れを癒す渡船であったかもしれない。その一方で、恩智川などいくつかの川には橋が架けられていたはずである⁷⁰⁾。

ここで改めて、この日に詠んだ「菊の香にくらがり登る節句哉」の解釈を試みるならば、「くらがり登る」とは、従来言われる通り「暗峠を登る」ということにほかなるまい。ただし芭蕉没後ほぼ100年後に刊行された『河内名所図会』（1801年刊）に記されている「暗峠」の由來說、つまり余りに急坂なので「鞍を借り」て、つまり馬を仕立てて登るという意味が込められていた可能性を改めて指摘しておきたい。つまり、「くらがり登る」には、「くらがり峠を登る」と「鞍借り登る」という両方の意味が掛けられていたという可能性である。

その場合には、「9月9日の菊の節句ゆえに菊の香を嗅ぎながら、重陽の節句なので高い場所である暗峠まで、くらがり（暗がり・鞍借り）の名の通り昼なお暗い峠道を、鞍を借りて馬に乗ってゆく節句であることよ」となる。この地方の言葉で「えらいしんどい」体調の旅の中で、これほど手の込んだ発句を詠む芭蕉の才能（現代流行の言い方をするのであれば「俳諧力」）に、あらためて感心させられる。

暗峠については、『河内名所図会』と同じ秋里舜福（籬島）編に成る⁷¹⁾『大和名所図会』（寛政3＝1791年刊）に、生駒山の南にある小倉山に続くので「椋ヶ根」、あるいは松や杉が生い茂り昼なお暗いので「暗峠」と名付けたという2つの語源説が記されている。『大和名所図会』の刊行年である寛政3年は『河内名所図会』刊行の10年前であり、両者の語源説の変遷は、この10年間に籬島が新たに得た知識を後者に書き込んだものと考えられる。

「くらがり」とは、本来は「暗がる」という動詞から派生した名詞である。『竹取物語』に「速き風吹きて、世界くらがりて」とあるように、「暗くなる」（曇る。闇に包まれる）という本来の意味が「暗がり」にもつきまとった。「嫌がる」「寒がる」など自発の動詞の語尾「がる」が習合した「暗がる」（暗いと思う。暗さを恐れる）という用法が派生した形跡もあり、「道理に暗い」「暗愚」という意味も生じた。このように、「くらがり」とは複雑な意味を有した言葉であることを確認しておきたい。

たとえば近年までよく使われていた言葉に「手くらがり」がある。手の陰に隠れ、あるいは影が覆って見えにくい状態を指して用いられた。「暗がり」には、何かに遮られて見えにくくなるという意味がある。たとえば宝永元年（1704）竹本座初演とされる近松門左衛門作の世話物浄瑠璃『薩摩歌』（一楽子編『外題年鑑』明和版による）に、「くらがりの商ひはせうもの（しょうもの）でござらぬ」（意訳：人の目を盗んでする商売は正物（正しいもの）ではない）とあるのは、人

目につかないところでこっそり行う悪事へのうしろめたさを表現している。また、やや後代の用例となるが、寛保4年（1744）刊の浮世草子『其磧諸国物語』に「合点であらうと思ひしに、暗がり家中と同じ暗がり仲間でおはするか」と見え、ここではさらに「暗がり」という言葉に込められた罪、表沙汰にできない行いへの罪悪感を強調している⁷²⁾。

芭蕉の「くらがり登る」にも、そのようなうしろめたさが込められていた可能性も考えられる。もちろん、芭蕉が犯した罪を懺悔したというわけではないが、たとえば昨日まで滞在していた伊賀上野のことを思い、故郷を捨てた自らをかえりみるということはあっただろう。同行した次郎兵衛の存在から、正式に結婚できないまま亡くしてしまった寿貞のことを思い出すこともあったかもしれない。いずれにせよ芭蕉の句境には、晩年に至るにつれて、原罪性とでも呼ぶべき性格が増してゆくと私には感じられる。それゆえにこそ「軽み」が求められたともいえるのではないか。それは芭蕉が優秀な俳諧師であったからというだけでなく、自省的な人間が歳を取ると、自らをかえりみる機会がおのずから増えてゆくという自然な成り行きにもかかわるような事情にも発すると思われる。

つまり、「菊の香にくらがり登る節句哉」とは、これまで考えられてきたように重陽の節句と暗峠を詠み込んだだけの単純な発句では、おそらくなかった。同時代人の西鶴が元禄5年（1692）刊の『世間胸算用』（「奈良の庭竈」^{にわかまど}）に描いたように⁷³⁾、追い剥ぎの出るような峠道の名が「くらがり峠」であることを知った芭蕉が、その名に関心を持ったことは十分に類推できる。そして、そのような名前の峠を越える山道に苦吟しつつ、来し方を回想しての作句であったとも考えられる。

その一方で、この時期の世間一般の菊への関心があった。すなわち元禄期とは、本邦最初の菊ブームの初発期に当たる。ブームの中心となったのはソメイヨシノ（染井吉野）にその名を残す園芸街の染井であり、ここは芭蕉が30代の前半から中盤にかけて住んだ関口（文京区）からは目と鼻の先である。芭蕉の頃（17世紀後半）には、すでに植木屋が立ち並んでいたという。

また、染井（現・豊島区駒込4～5丁目）には芭蕉が江戸出府前に勤めていた藤堂家の江戸屋敷（下屋敷）があり、「染井屋敷」と呼ばれていた。芭蕉の出府は、台所用人として仕えた藤堂新七郎家の嫡男・良忠が亡くなって、仕官を諦めた後のことであったが、芭蕉にとっては染井界隈が江戸における数少ない知己の居場所であったことは間違いなく、おそらくしばしば足を運んだものと思われる。

北宋の周敦頤^{しゅうとん い}が『愛蓮説』に「花之隱逸者也」と記して以来、菊は「隱逸花」「陰君子」などと呼ばれ、隱者の象徴とされてきた。9月9日の重陽の節句に長寿を祈って菊酒を飲む風習

は、芭蕉の頃には普通に行なわれていた。また、この日には高い所に登って長寿を願うという風習も健在であった。有職故実に詳しい芭蕉でなくとも、これは当時の万人が知っていたはずである。

当時のことわざに「暗がりに鬼をつなぐ」「暗がりから牛を引き出す」などがある（『大辞林（第3版）』三省堂）。いずれも西鶴の浮世草子に見える用例で、「暗がりに鬼を繋ぐとは今宵なるべし、おそろし」（『世間胸算用』）、「まことに暗がりから牛を引き出すごとくに、楽寝をおこせど目を覚さず」（『西鶴置土産』）と用いられている。一方は「真相を知ることができなくて、気味の悪いことのたとえ」、もう一方は「物の区別のつきにくいたとえ。また、ぐずぐずして動作の鈍いさまのたとえ」といったイメージで用いられており、芭蕉がこれらの慣用句を意識していたかどうかはともかく、「くらがり」には、これほど多様な含意があったことを確認できる⁷⁴⁾。

芭蕉は数えて51歳（満49～50歳）、当時の意識では十分に老人である。「くらがり登る」と詠んだ芭蕉には、もちろん長寿を祈る重陽の節句に、順接的であれ反語的であれ自らの老いの意識を照らす自照があったに違いないのだが、そこにはさらに「くらがり」めいたあてのない病の自覚と、そしてそれらを隠者の自己意識に収斂させるという複雑な気持ちの重層があったと思われる。少なくとも「くらがり登る」とは、これまで考えられてきたように、ただ単に「くらがり峠」という名称を繰り返込んだ表現のレベルにすぎなかったとは思えない。このように、「菊の香に」に続いて「くらがり登る」と芭蕉が吟じた際、そこには多様な意味、多彩なイメージが込められていたと考えられる。

芭蕉が暗峠を越えたのは、この時が初めてだったと思われる⁷⁵⁾。結局、芭蕉は河内を記した紀行文を残さなかったし、河内野は芭蕉の紀行文には描かれなかったけれども、総行程600里と称される『奥の細道』に代表される紀行文には、芭蕉が赴いた先々の風習や言葉、あるいは故事や逸話なども数多く取り上げられている。旅の最中あるいは帰宅後に、芭蕉が手を尽くして調べ、または識者に尋ねて記したことをうかがわせるに足る記述である。

いくら体調が悪くとも、芭蕉が「暗峠」という地名について、その由来を訊ねなかったとは到底思えない。それがこの度のことであったか、以前の河内行の時であったかはわからないが、「くらがり登る」には「暗峠」という地名が詠み込まれただけでなく、「鞍借り登る」（馬を借りて登る）が重ねられていたのではないかと想定してみたい。それは当代のみならず歴代の俳諧師の中でも、おそらく誰よりも馬の句を好んで詠んだ芭蕉ゆえのことでもある⁷⁶⁾。馬上で居眠りをして落馬しかける句、馬に食われる道端の花、さらには野宿の枕元で馬に小便をされ

る句までを詠むような俳諧師を、他に知らない。

ただ、「くらがり登る」の句の場合、実際に鞍を借りて馬に乗ったのか、それとも「鞍借り」という言葉を発句に入れて趣向としただけなのかは判断が困難である。というのも、当時奈良街道に備えられた馬は、先に見た通り、非常に限られた数だったからであり、この折の芭蕉の旅姿を誰も伝える者がいないからである。

ただし、暗峠の名の由來說として「鞍借り」があるのであれば⁷⁷⁾、事実として馬に乗らなくとも、「鞍借り」という言葉を芭蕉が趣向もしくは言葉遊びとしてこの発句に詠み込んだことは十分に考えられる。その場合には、芭蕉が馬に乗って峠を越えたという推測は成り立たなくなるが、発句の解釈はより深まるだろう。

4. 芭蕉の「枯野」

芭蕉最後の旅となったのは、繰り返し述べているように、伊賀上野から奈良を経て大坂までの旅であった。その最後の一日は、奈良を発って暗越奈良街道（奈良では難波街道・大坂みち）をほとんど一直線に約35km。本稿で見てきたように標高差約450mを、夜明けから日没後まで半日以上もおそらく歩いて、芭蕉は到着後に寝込んだ。この行程での唯一の宿場が、河内野の広がる中に置かれた松原宿であった。

前日すでに伊賀上野から奈良まで40km余りを移動してきた病身の芭蕉にとって、その体調に鑑みれば、これは相当なハードワークであったはずである。もちろん、深川から大垣まで、歴史に残る全行程2400キロに及ぶ「奥の細道」の旅に代表される大吟行も難儀であったであろうが、別の意味で暗峠越えのこの一日ほど疲れた旅もなかったのではないか⁷⁸⁾。

その意味で、病の床にある芭蕉の夢うつつに去来するのが、ほかならぬこの一日であったという推測も、むしろ蓋然性の高い推測になるのではないか。以上のように考えて来るならば、その時の夢に浮かんだ「枯野」が、「河内野」であったことを否定できる者はいないだろう。もちろん、それを証明することも難しいのだが。

松原宿そして奈良街道の道筋は、これだけ開発された大阪府内にあって、未だかつての面影を微かに残している。松原宿にあった萱葺屋根の家は失われたが、かつての松原村（現・東大阪市松原1丁目）には、「左 大坂道、右 なら／いせ 道」の文字が深く刻まれた道標が立ち、何よりも宿場時代の道筋がそのまま残されている。

このように、旧街道の道標が残っている事例は、河内では珍しくない⁷⁹⁾。東西・南北、さらにそれらを縫うように多数の街道が走っているのに加えて、それらの多くが川筋に由来するために折れ曲って進むことが非常に多かったことから、道標も数多く必要だったのだらうと現在の私は考えている⁸⁰⁾。

私は東海道の藤枝宿近くで生まれたので、街道というのは基本的に直線だと思ってきた。そして、宿場近辺では狙撃を避けるために例外的に非直線になると教えられてきた。河内に住み着いてから、街道は（川筋に沿って付けられたものの多いこともあって）直線部分が限られていて、曲線とも直線とも呼びがたい、いびつな（自然な）形で続いていることが印象深かった。また、江戸（及びそこから延びる街道）が公儀のものであり、東海道などは一里塚が基本的な道標である（それも土盛りの上に松が植えてあるような形態が多く、石標は必ずしも多くない）。それに対して、大坂や河内では民間の設置が多いために道標もまた多く見られ、その上よく整備されて、近代に至って街道が開発されてからも（ある種の個人財産として）保存されたものの個数が多かったためであろう。むしろそのことは、橋について多く語られてきた⁸¹⁾。

とりわけ、河内平野の生駒山麓では、生駒山より産する生駒石⁸²⁾を道標としても多く使用し、近年に至るまで石切職人が多くいて、と、道標が設置され整備される環境が十分に整っていた。

以上のように、多く設置された道標保存の環境が整っていた河内ではあるが、近年に至って多くの道標が失われた。私が1996年に河内に住み着いた頃には、道標を記録した書籍や報告書が何冊も刊行されており⁸³⁾、民間にも文化財としての道標という認識が浸透していたためであろう、道標は大切に保存されてきた。それから20年以上たつが、実際にいくつかの道標が失われ、道路工事とりわけ乱暴なアスファルト敷設のために保存状態が一気に悪化したものも少なくない。

ただ、道標が状態よく保存されているということは、街道筋が細い道路のままであり、宅地開発がままならないという状況をも同時に意味している。自動車主体の幹線道路は益々整備される一方で、旧街道が手つかずのまま放置されることも多かったために、道標が撤去も破壊もされずに残存したという一面もあったはずである。

暗越奈良街道沿いに建てられた家々は、よほどの市街地を除いて第二次大戦末期の空襲から逃れ、再開発からも取り残されて往時の面影を残してきた。しかし、21世紀に入ってから住宅、とりわけ耐震基準制定以前の戸建て住宅や文化住宅の激減に象徴されるように、そのような地域にも（関西経済の停滞にもかかわらずと言うべきか）開発の波は徐々に押し寄せてきている。

かつては文化財としてより、身近な風景としての道標に対する地域住民の愛着が、車社会に

あっても多数の道標を残存させる原動力になったと言ってよいだろう。ただし、車社会ゆえに、「車止め」の役割を期待して残された石標もあったのは残念である。

道標は、いったん保存対策をとれば、ほとんど維持費はかからない。しかし、先述の通り、松原宿に残っていた萱葺屋根の家が撤去されるなど、特に個人住宅の場合には事情は全く別である。維持費や修繕費のみならず、重い固定資産税や葺き替えの費用など、保存にはきわめて大きなコストがかかる。そのためもあってか、道端に道標のみがぽつんと残され、その周辺には往時の面影を残すものが何もないといった風景も少なくない。

それでも「道標」という「点」を結んで行くことによって、まずは「(旧) 街道」という「線」が、そして街道と街道をつなげて行くことによって、かつての人々の暮らした地域（「面」）が立ちあがって来る。そこに、もし建物などの「立体物」があれば、歴史や文化に関心を向けたことのない（特に若い）人たちにも、その価値をより積極的・自発的に理解してもらいやすくなるだろう。「関心」こそは空間に時間をプラスする、つまり「立体」という三次元の世界を四次元に変換するための最大の動力源ではないだろうか。現在というひとつの時間に、過去や未来をダイナミック（動的）に結びつける役割を果たせるからである。

教科書の中だけにある「歴史」は、三次元（私たちが生きている世界の質感）すら伴わず、まさに二次元の段階にとどまっている。しかしそれが身近になった時、つまり「私の世界」の一部になったとき、はじめて三次元化し、さらに四次元化する（時間を超える）契機を得るだろう。

ただし、そのためには、教科書や書籍という二次元の情報も大切だし、道標や歴史的建築物などの三次元情報も大切である。そこに「関心」（興味・知的好奇心）という、時間を遡ってゆくための原動力が付加された時、「歴史」は初めて個々人の中でダイナミックに立ち上がる。「関心」が大事なのは、その「動力」は「過去という歴史」だけではなく、「現在という歴史」にも、さらには「未来という歴史」にも、私たちを運んでくれる「力」となりうるからである。

5. 三つの芭蕉碑—東大阪市の芭蕉

1) くらがり登る

江戸時代の暗峠の様子がよくわかる絵図は、享和元年（1801）に刊行された『河内名所図会』を以て第一とするが⁸⁴⁾、元禄7年（1694）に松尾芭蕉が越えてから100年余りを経たこの時代

の峠の様子を、「くらがり登る」の芭蕉句に重ね合わせることが到底できない。むしろこの図に描かれた風景は、近世前期から後期に至るこの100年間の変化が並大抵ではなかったことをうかがわせる。

端的に言えば、幾筋もの大河を越えて行かなければならなかった17世紀末の奈良街道と、川越えの苦勞から解放された18世紀末の奈良街道との大きな落差である。

19世紀最初の年に刊行された『河内名所図会』に描かれるその場所が、全く以て平地であるかのような趣を呈していることこそ、まず注目したい。標高455mという天空に、地上よりも繁華な空間が現出していたのであるから、そこは一種のアミューズメント空間であり⁸⁵⁾、異世界であっただろう(図4⁸⁶⁾参照)。

峠道の両側に軒を連ねる20軒ほどの家々は、一段下に建てられた民家と比べて二回りも大きい。これは街道沿いの家々にアクセントを置いたデフォルメであろうか。『河内名所図会』の他の図と比較しても、同書の成立趣旨に照らしても、もちろんいくらかのデフォルメはあった

かもしれないが、ほぼ実物通りであったと考えてよいのだろう。

それらの大きな店構えの家々の中には、並んだ屋根屋根の中に一際高い屋根も見え、表に面した店の裏(奥)には民家らしい屋根もいくつか見受けられる。軒端に葦^{よし}簀^ずを張り出した店、品書きを軒先から並べて垂らした店など、ひとつひとつ異なる店先の床几には、何人もの旅人たちが腰を掛けて足を休めている。

旅装束の人々の中には天秤棒をかついだ者の姿もあり、前後一人ずつの二人で担ぐ二枚駕籠も見えて、それほどに生駒越えの道が整備されていたこと、そして、当然のことながらここを生計の場とし

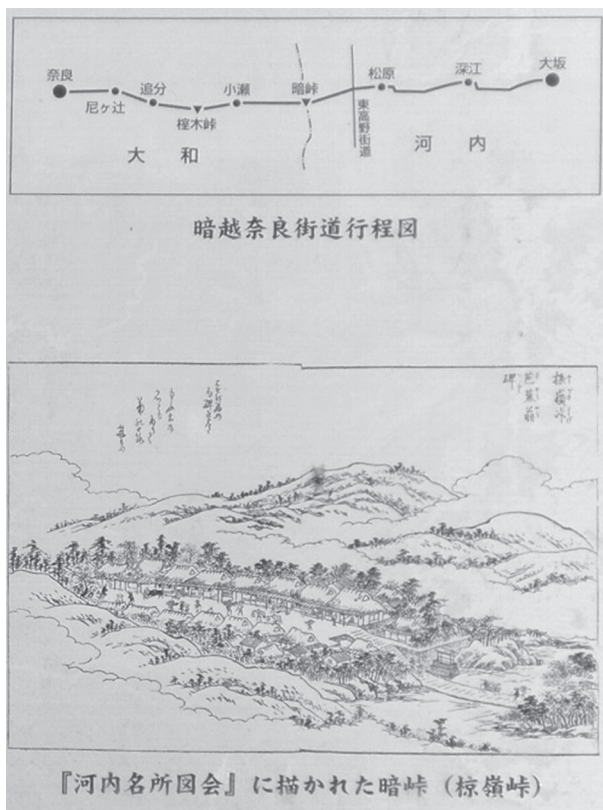


図4

ていた人たちがいたことを伝えている。

峠の前後（山道）に鬱蒼と茂る森の暗がりは、もちろん実在したものであろうけれど、すでにこの頃、峠そのものは「暗がり」とは無縁の世界であり、むしろ明るく開けた山中の異世界、そう言ってよければ旅人たちをもてなす祝祭的空間であった。

それにしても、5月11日に江戸を発った時点で芭蕉の「胆石」⁸⁷⁾（元禄7年5月2日宛先不明書簡）は相当悪化していたはずで、にもかかわらず9月8日に故郷の伊賀上野を出発して奈良（猿沢池辺り）で1泊した芭蕉は、翌9日に奈良から大坂（高津）までを一気に移動する。その間の約35キロは平坦な道のりではなく、述べた通り、間には標高455メートルの生駒山暗峠が控えている。

この日、旧暦9月9日（新暦換算で10月27日）の日の出の時刻は午前6時12分頃である⁸⁸⁾。もしも夏（たとえば新暦6月中旬）であれば午前4時43分の夜明けであったから、それよりも1時間30分ほど長く休めたとは言える。しかし、すでに病によって芭蕉の身体は、本来であれば旅には耐えられぬほどに衰弱していた。

おそらくは夜明けを待って出発し、奈良側の緩傾斜を登って暗峠に着いたのが、昼頃のことであっただろう。その日の行程のちょうど半分であり、ほぼ間違いなく暗峠の茶屋で休み、大坂側の急傾斜を下って河内平野に降りた。病身や年齢などから考えて、午後3時前後に松原宿であらためて休憩をとったものと考えられる。旅に生きた芭蕉が数限りなく越えてきた最後の宿場であり、この日が旅の人生の最後の日となった。

2) 勸成院の句碑と中村来^{らいし}相

支考の『笈日記』⁸⁹⁾によれば、芭蕉たちは生^{いくだま}玉（天王寺区）の辺りで日没を迎えている。まさに沈む夕日に向かって移動してきたのであった。

今里で奈良街道に別れ、上町台地への坂を登りつつ千日前通りを2キロ半ほど歩いたところである。この日の日の入り時刻は午後6時43分頃。夜明けから約12時間半後であった。上町から、今まさに夕陽が沈んだばかりの景色を芭蕉は目にしたはずである。

生玉から高津は、まさに目と鼻の先。生玉神社から高津宮は、ほぼ真北に当たる。日没後をわずかに歩いて、芭蕉は門人洒堂宅に旅装を解いた。この晩、出てきた月は半月をやや過ぎた姿であったが、おそらく芭蕉には、亥の刻とともに上る月を見る体力は残されていなかっただろう⁹⁰⁾。

かつての河内郡豊浦、現在の東大阪市豊浦町は生駒山麓にありながら、河内湾時代の地形を

想起させる⁹¹⁾。飛鳥の豊浦との関わりを思わせる地名であるが、これまで考証がなされたことを知らない。生駒山麓の豊浦という地名は、かつての河内湾の名残りであろうか。

その豊浦にある日蓮宗勸成院の境内には、1基の句碑が佇つ。

「菊の香にくらがり登る節句哉 芭蕉翁」

そして「寛政十一年己未十二月十二日 棕嶺下来相建」と裏書される。

「棕嶺」とは暗峠のことと言われるが、こう書いて生駒の嶺を表していた可能性も考えられる。生駒山全体というより、暗峠付近と言ったほうが適切であろう。この句碑の「棕嶺下」という表記が、そのことをうかがわせる。その場合、「棕嶺」が暗峠の「暗い」という表記を導いたのではなく、むしろ「暗（クラガリ）」から「棕嶺（クラガネ）」という表記が派生した可能性を考えることができる⁹²⁾。

というのも、「棕嶺」が暗峠の由来であったことを記した文献が、繰り返し引用した享和元年（1801）刊の『河内名所図会』以前に見当たらないからである。編者である秋里籬島は、以下に見るように、ほぼ間違いなく当地を訪れて『河内名所図会』を書いている。勸成院の芭蕉碑が建てられたのは寛政11年（1799）12月であり、あたかも『河内名所図会』の編集と相前後してのことであった。

句碑に見える来相^{らいし}は、この地の俳諧グループの中心であった中村来相のこと。『枚岡市史』⁹³⁾には、芭蕉百年忌に際して興行されたと推定される10月8日と11日の連句懷紙「芭蕉忌余興」「平岡禪寺興行」が紹介されている。8日の「余興」は、千鳥を兼題に十韻、芭蕉忌前日に当たる11日の「興行」は「けふ祭る神は翁ぞかな月」の起句にはじまる二十韻。「敷ごしにきくや芒の枯る音 亭主 蓬宇」「竹藪や時雨に夜のふけて（一部脱落）奇淵」と、芭蕉句を意識した付け合いが続く。中でも、芭蕉祭祀の行事を創始したとされる菅沼奇淵（天保5年に70歳で没）が参加していることが目を引く。これらの興行を企画したのも奇淵であっただろうか。

芭蕉句の竹藪といえば「鶯や竹の子藪に老を鳴く」（『炭俵』）であろう。元禄7年5月に江戸を発ち関西へと向かう折の句であり、まさに奈良街道へと直結している。また、「古い」を詠んでいることも留意される。

一方、その忌日を「時雨忌^{しぐれ}」とさえ呼ばれる⁹⁴⁾芭蕉に、時雨の句は数多く、優に10句を超える。それらの中でも「世にふるもさらに宗祇のしぐれ哉」（『虚栗』天和3年）、「旅人と我名よばれん初しぐれ」（『笈の小文』貞享4年）、「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」（『猿蓑』元禄3年）の3句は非常によく知られている。いずれも旅の句であり、芭蕉の時雨といえば、旅のアイコンのひとつであった。

8日の「芭蕉忌余興」には、啼く千鳥に芭蕉への敬慕を託しつつ、「くらき夜を引^{ひき}かたむけ^{なく}て鳴千鳥」と、芭蕉が最後の旅で越え、「菊の香に」の句を残した暗峠を意識した句を冒頭に据えている。芭蕉の千鳥の句としては、「冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす」（『野ざらし紀行』貞享2年）や、芭蕉生前に建てられた唯一の句碑（鳴海の千鳥塚）で知られる「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」（貞享4年）などがある。こちらも、いずれも旅の句であり、前者は、この句が詠まれた桑名本統寺の紋が牡丹であることから、その「場所」や住職の古益に対する挨拶の句であることが赤羽学先生によって指摘されている⁹⁵⁾。

句碑としては珍しい四角柱のもので、来艸が芭蕉の遺薫を慕ったことをよく示している。暗越えの街道筋にあったというが、山津波（土石流）によって三分割された。埋もれていたものを後に掘り出し、つなぎ直して改めて境内に設置したという⁹⁶⁾。

寛政11年といえは芭蕉の没年（1694）から105年目である。当時生駒西麓に来艸を中心とする熱心な俳諧グループが活動していたことを示しており、彼らが100年前に自分たちの土地を通して行った俳聖芭蕉を追慕していた様子が伝わって来る。そして、このことは、『河内名所図会』にも記されている。

「近頃寛政十一年己未十二月、豊浦村の来艸、此句碑棕ヶ嶺峠街道の側に建て、蕉翁の一百年忌の追福とす。又諸方の俳諧の句を聚^{あつめ}てこれを小冊とし、浪花の二柳^{じりゅう}の序ありて菊の香と題号せり。」

自らもその方面に素養のあった秋里籬島が、おそらく来艸に直接確認して記したのであろう。でなければ、これだけ詳細な情報を得ることは難しかったと思われる。したがって「近頃」と記すこの記事、すなわち寛政11年12月からほぼ半年の間に書かれたこの記事からは、俳諧集の編集はもとより句碑の建立も実際に籬島が見聞したものと考えてよさそうである。そうであれば「棕ヶ嶺」説は、この句碑から（あるいは来艸本人から）始まったという可能性が高い。

従来、『河内名所図会』に「棕ヶ嶺」の説が記されていることを根拠として、暗峠の表音と表記が「クラガネ（棕が嶺）」から転じたことを述べる所論を見かけるが、これは本来、ここまで述べてきた芭蕉句碑の「棕ヶ嶺下」、もしくは来艸からの直話より来ていると考えられる。よって、「暗峠」の語源由来説としては弱いと言わざるをえない。

3) 六郷社による句碑

ところで、「菊の香に」の句碑は東大阪市内にもう1基あって、明治22年（1889）に建立されている。その5年後には芭蕉二百年忌を迎える頃であるが、特にそのことを意識したもので

はないようである。

また、明治22年といえば、郡制が敷かれ、河内が北・中・南の三郡に分かれる明治29年の7年前である。したがって、建てられたのは旧の河内郡であり、その後中河内郡から枚岡市へ、そして現在の東大阪市へと変遷した。かつてこの地で活動していた俳諧結社「六郷社」有志の建立に成る。

六郷は、古箕輪神社前から稲田本町寝屋川合流点までを流れる六郷井路（水路）が有名で、河内平野の中でも生産性の高い水田が広がる肥沃な土地として知られていた。J R学研都市線（片町線）の駅名にその名を残す鴻池新田があったのも、この周辺である。六郷社の俳諧としては、東大阪市史資料第一集の『河内六郷社句集』⁹⁷⁾ がある、かねてより一部の人々には知られてきた。

句碑が「近代大阪最後の粋人」⁹⁸⁾ と呼ばれ、「大坂の最高の数寄者」⁹⁹⁾ とも称される豪商平瀬露香によって揮毫されていることとも照らし合わせれば、明治期のよく言えば有閑知識階級、悪く言えば道楽者のつどいであったことをうかがわせる。こちらは、いかにも句碑らしい句碑といえる。そして、建立されたのは来耜の句碑が土中に埋もれていた頃であった。

六郷社によって建てられた中野（東大阪市）の頌徳碑と燈籠句碑の傍らに建てられた説明板には、以下のように記されている。

「六郷社と西村宗逸／大正四年（1915）に刊行された「萬歳楽」という句集によると六郷社は明治七年二月に創立されました。／俳句会は四十一年間に二百三十三回も開催され、日本の地方文学教育に貢献があったと載せられています。／六郷社は中野村の西村宗逸が、地名の六郷庄から名付けられた俳句会です。／句集は「花稔集（明治二十三年）」、「六郷吟社梅五句集・同句抄（大正十五年）」など多くのものが刊行されました。／河内地方では、江戸時代から俳句などの文芸活動が盛んでした。／六郷社も、その風土の香りを受け継ぎ、大津市や大阪市内の各句会とも交流を持ち、昭和の初めまで活躍していました。／頌徳碑と燈籠句碑は、明治四十四年（1911）に建てられました。（中略）句碑には「来る年の尚いつまでか生の松」と刻まれています。／宗逸の地方文化の向上に果たした役割は大きいものがありました。／平成二十五年三月」

「六郷庄」は、『大阪府志』¹⁰⁰⁾ によれば、「西光寺（東大阪市吉原）」の段に、

「正善は、俗名を佐々木重綱といい、江州佐々木氏の一族で、文明年中（一四六九－八七）戦乱を避け当地に移住。久宝寺村（現八尾市）にいた蓮如に帰依して出家し、今米村の中氏の援助で当地に道場を創設したという。（中略）当寺の住持藤井氏は豊臣方の武将木村

重成の縁者で、重成も幼少の頃から当寺に出入りしている。その子、門十郎は藤井家の養子となり、代々当地一帯の六郷庄の大庄屋を務めた」などと記されている。

『平家物語』や『源平盛衰記』に描かれて人口に膾炙する、宇治川の戦いでの先陣争いを梶原景季と演じた父親の高綱とともに源平合戦で活躍した佐々木重綱をはじめ、蓮如・木村重成、そして中甚兵衛の先祖と、中河内に欠かせない重要人物たちが次々に登場する。

その後、大正12年（1923）に至って来相の句碑が掘り出され、修復のうえて日蓮宗勧成院に建て直された。すなわち、同じ「菊の香を」の句を刻した2つの句碑が、勧成院と枚岡公園という近隣に、わずか数100メートルを隔てて並び立つこととなったのである。そして、現在に至るまで、双方の句碑はそのままの位置にある。

4) 吉田墓地の芭蕉碑

さらに、もう1基、両碑から約2.5km西に芭蕉碑が建つ。東大阪花園ラグビー場と花園図書館の間にある吉田墓地には、「芭蕉」（台座正面には「門人」）とのみ彫った石碑が建っている。現在の位置は、芭蕉にとって最後の宿場となった奈良街道松原宿の南側に当たる。材質の粗い自然石に彫られた文字は「芭蕉」の他に見当たらず、建立年代も、建立に関わった人名も、他に明らかにできる史料も知られておらず、一切明確ではない。

ただし、この碑の横に立てられた説明板（東大阪市教育局）に記すように、近世後期にこの近辺に住み、同じ吉田墓地に墓所のある文人吉田思玄に関わったと考えることが、現在のところ最も妥当であろう¹⁰¹⁾。

豊浦の中村家（来相）、日下の森家（生駒山人）、喜里川の中西家（多豆廼舎・多豆岐）、今米の川中家、市場村の岩崎美隆など、近世中・後期を通じて中河内の中央部（現・東大阪市）には、「文化サロン」の数々が形成されていた。

しかし、彼らが芭蕉碑を建てた形跡は残らない。来相であれば、「菊の香に」の句碑同様に自らの関



図5（筆者撮影）

与を残したであろうし（たまたま芭蕉碑からは年記・記名等が磨滅してしまった可能性もなくはないが、そもそもそのような石を選ぶとは考えにくく）、他の者たちについても同様である¹⁰²⁾。

現在の吉田墓地に最初から碑があったと考えるよりは（とりわけ現在の南口のすぐ脇という位置に当初から据えられたとは考えにくく）、松原宿にあったものをのちに移転したと考えたほうが理解しやすい。松原に芭蕉碑を建てる理由は、宿場の位置ということで理解できるのである。

吉田墓地は旧吉田川の左岸（西岸）に当たり、右岸（東岸）にある松原宿の対岸やや南寄り（上流）である。芭蕉がここを通ったのは1694年、前述の通り大和川の川違え（付替え）の10年前であり、この芭蕉碑が建てられた時には、すでに旧大和川は付替えられていたと考えられる。

縦64cm（二尺余）、横47cm（ほぼ一尺半）という芭蕉碑の由来を語るのは、上記の通り、台座に彫られた「門人」の一語のみである。台座は、芭蕉の文字を刻んだ碑石とは異なる材質の石でできており、「芭蕉」と「門人」の文字にも統一性はない。したがって、果たして当初から揃って積まれていたものかという疑問が残るが、現状では、そう考えておく以外にない。

芭蕉存命中に、実際の門人がこの地域にいたことは知られていない。のちの地方俳人の中の芭蕉を慕う何者かが、「門人」という言葉の中に私淑の思いを込めたものと考えられる。芭蕉の没した17世紀末以降に、この地で俳諧を嗜んでいたという意味でも、やはり吉田思玄あたりが適当だということになる。

思玄であるとするれば、時代的には来艸たちによる百年忌と、六郷社による二百年忌の中間に当たる。そうであれば、建立の年は芭蕉百五十年忌の天保15年（1844）である可能性が最も高いと考えられる。

芭蕉より5年前にこの地にやってきた本草学者の貝原益軒が、「南遊紀行」（『諸州巡覧記』）に詳細に記しているように、この地域は当時的大河吉田川が流れる荒蕪地であり、俳諧に関わる者がいたという記録も残らない。この地に地方俳諧の担い手が現われたのは旧大和川の付替え（1704年）以降、旧川床を主体とした新田開発以後に生産力を高めたこの地で成功を収めた者、もしくはその流れを汲む者であったと考えるのが妥当であろう。具体的には、18世紀に入ってからのことになる。

もちろん、すでに大坂三郷で成功を収めた大坂商人が建立に関わった可能性もあるだろうが、そうであれば、なぜ三郷（大坂市街地）や暗峠に建てなかったか、また、なぜ「芭蕉」だったのかが説明できない。これらのことから考えて、芭蕉碑を建てたのはこの地に住む者であり、

芭蕉の没後かなり経ってからのことと思われる。そこから導かれる建立者の名は、第一に吉田思玄、次いで六郷社中の誰か、三番目に来耜であったと考えておきたい¹⁰³⁾。

かくて、現在の東大阪市内、それも奈良街道沿いの3箇所、芭蕉にちなんだ3基の石碑が建てられて現在に至る。これらの他には、東大阪市内に芭蕉に関わる石碑が建てられた形跡はなく、現存もしていない。それも、句ではなく芭蕉の名のみが彫られた1基を除いて、他の2基は（一方が山津波に飲み込まれて所在が知れなくなった間に、もう一基が、いわば復元されたという事情はあったものの）同じ「菊の香にくらがり登る節句哉」の句を刻んでいる。暗峠を詠み込んだ該句が伝わるだけの芭蕉を、これほど手厚く顕彰するところからは、まずは都会的な文雅の交流への憧憬を抱いた文人が、郊外であるこの地に存在したことを読み取るべきであろう。

「菊の香や奈良には古き仏達」

「菊の香や奈良は稀代の男ぶり」

「びいと啼く尻声悲し夜の鹿」

「菊に出て奈良と難波は宵月夜」

同じく9月9日に奈良街道を通った芭蕉がしたための句である。「奈良には古き仏達」などは、「くらがり登る」の何倍もよく知られた句であろう。「びいと啼く尻声」の句は近年人気作家万城目学によって『鹿男あをによし』¹⁰⁴⁾に取り入れられ、同作はテレビドラマにもなって広く知られるに至った。

ところが「くらがり登る」の1句のみを、生駒西麓、特に東大阪市は取り立てて好んできた。しかし、「菊に出て奈良と難波は宵月夜」などは、いわば奈良と難波（大坂）をグーグルアースのように鳥瞰的に地上から掴み取って描いた句であり、句の中には奈良と難波の要に当たる生駒山の気配が色濃く漂っている。

おわりに

以上、生駒山の暗峠を越えて、河内（東大阪市）にやって来た芭蕉の姿と、その後に残された文化的な影響を瞥見した。

「文化の力」を測定するには、さまざまな方法が存在するだろう。ここでは、松尾芭蕉という一人の俳諧師（現在、世界で最も有名な日本の詩人）を取り上げて、「東大阪市の文化」

の一端を見てきた。

ところで、本稿では松原宿の遊里（花街）としての側面には、あえて触れなかった。それは、芭蕉来訪の頃には存在しなかったからであり、逆に、明治時代初期に姿を消しているため、現代的視点からの考察にも入ってこなかったからである。しかし、この地域を通時的（歴史的）に考察してゆく場合には決して等閑視されるべきことではない。そのため、本稿の末尾に付言しておくこととする。

この地には、近代（明治維新以降）に至っても次々と作家・文学者たちが訪れる。その中には直木三十五のように、奈良街道にもほど近い場所に数年間居住する者もいれば、谷崎潤一郎のように居住（滞在）は数か月であったものの、自らの文学の源泉となる松子夫人との出会いをここで決定的なものにする文豪もいた。志賀直哉はこの地域を週に何度も通過して奈良在住時代に大阪との間を往還したし、先述の直木も志賀と同じ路線（大阪電気軌道）に乗って大阪市内のプラトン社に通勤を続けた¹⁰⁵⁾。

その路線の開通直前に大阪市内から隧道工事の様子を作品（『行人』）に書き付けたのは夏目漱石であったし、東大阪市の東北端に位置する隧道（生駒トンネル）に対して対角線上に当たる西南端の大蓮（河内国渋川郡大蓮寺村）を作品（『大塩平八郎』）に記したのは森鷗外であった。漱石の最後の弟子である芥川龍之介とともに直木の先導で大軌に乗せられ、生駒山の山腹にある歓楽地までやってきた宇野浩二は、大軌が敷設される前に沿線の若江小学校で代用教員をつとめた経験があった¹⁰⁶⁾。

本稿では、およそ何千もの宿場を歩き、旅の生涯を送った松尾芭蕉の、最後の宿場となった奈良街道の松原宿を中心に、この地域に残った文化の一端を見てきたのである。本来であれば松原と暗峠の関係など、街道筋を詳細に観察するのが定石であったろう¹⁰⁷⁾。今後、暗峠を論ずるには芭蕉句を取り上げることが不可欠になる。それは「文化」ではなく「文学」の論として、改めて俎上に乗せて吟味する用意があることを最後に書き付けておきたい。

〔謝辞〕

本稿は、平成29、30（2017、18）年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究プロジェクト「東大阪市の文化力（カルチュラル・パワー）に関する歴史地理的研究」（研究代表者：石上 敏）による成果の一部である。

本研究プロジェクトを計画・遂行するに当たり、大阪商業大学アミューズメント産業研究所および学術研究事務室の担当職員の皆様には多大な助力をいただいた。ここに記して心よりの

御礼を申し上げたい。

本稿を草するに当たり、杉山三記雄氏、足代健二郎氏、飛田太一郎氏には、貴重な書籍及び資料を恵贈いただき、ご教示を賜るなどの御恩をいただいた。また、資料整理の面で本学卒業生の藤本貴司氏、石谷智哉氏の手を借りた。末筆ではあるが、いずれも記して謝意を表したい。

〔注〕

- 1) 大阪商業大学商業史博物館HPバーチャルミュージアム「刊行物のご案内 その他」参照。以下同。
- 2) 『おおさか漫步』（平成7年11月21日刊、同8年1月二刷、同14年6月三刷）
- 3) 『続おおさか漫步』（平成9年7月31日刊、同14年6月二刷）
- 4) 『続々おおさか漫步』（平成12年3月10日刊。同12年8月二刷）、『新おおさか漫步』（平成15年3月14日刊）。筆者が平成8年（1996）4月に大阪商業大学に赴任した当時には正編と続編が完成しており、数年後から商業史博物館の運営委員を拝命したこともあって、その直後に編集が始められた『続々おおさか漫步』には最も裨益を受けて来た。
- 5) 奈良街道については、枚岡市史編纂委員会編『枚岡市史』（枚岡市、1968年）、布施市史編纂室編『布施市史研究紀要5「奈良街道の駅村とその助郷」』（布施市役所、1960年）などの他、上田恵美子・金谷一郎他『暗越奈良街道ガイドブック2012』（読書館、2010年）を参照。
- 6) 黒木喬『講談社現代新書 明暦の大火』（講談社、1977年）など参照。
- 7) 村田路人『街道の日本史33摂津・河内・和泉』（吉川弘文館、2006年）。ちなみに起点が高麗橋とされたのは明治9年（1876）に至ってからである。松原宿に関しては、注5）の『枚岡市史』の他、松田理一『わが郷土松原雑記（ふるさとまつはらのいろいろがき）』（私家版、1986年序）、杉山三記雄『暗越奈良街道を歩いた旅人たち（河内の街道を歩く4）』（読書館、2017年）などを参照。本来河内国新居郷に属したこの地が「松原」と呼ばれるに至ったのは、吉田川堤防の松並木に由来するという松田氏の見解に賛同する。実際、『河内名所図会』には堤の松並木が描かれている。
- 8) 大和川の河道改修、いわゆる「川違え」「付替え」に関しては複数の論が備わる。畑中友次『大和川付替工事史』（大和川付替250年記念顕彰事業委員会、1955年）、藤原秀憲『大和川付替（川違え）工事史：治水の恩人中甚兵衛考とその周辺』（新和出版社、1972年）など参照。
- 9) 論ずる対象が河内であり、大和ではないという理由もある。
- 10) この折の芭蕉に関しては無論多くの論が備わるが、河内という地域に着目をして論じられたことは皆無とあってよい。解釈論としての別稿を準備している。
- 11) 芭蕉の持病として「疝氣」（腹痛）が知られる。死因としても、かねてから潰瘍性大腸炎や腸結核などが挙げられてきた。山崎藤吉『芭蕉全伝』（建設社出版部、1941年）など参照。
- 12) 芭蕉書簡は、『芭蕉書簡集（岩波文庫 黄206-7）』（岩波書店、2005年）などを参照。
- 13) 雲英末雄・佐藤勝明『芭蕉全句集 現代語訳付き（角川ソフィア文庫）』（角川書店、2010年）など参照。
- 14) 『生駒市史（資料編1）明治までの生駒の歴史』など参照。
- 15) 立命館大学地理学同好会編『生駒山脈 その地理と歴史を語る』（積善館、1944年）、藤岡謙二郎編『生駒山地の人文地理』（大阪教育図書、1961年）など参照。
- 16) 注15）に同じ。この急坂ゆえに、のちに見る「鞍轡り」などの語源説が派生したものと思われる。なお、田中真吾『六甲山の地理』（神戸新聞総合出版センター、1988年）など参照。
- 17) 「幻住庵記」の引用は、井本農一他校注『新編 日本古典文学全集71・松尾芭蕉集（2）』（小学館、1997年）を参照。元禄5年7月『猿蓑』所収。幸田露伴『評釈 猿蓑（岩波文庫）』（岩波書店、1977年初版。リクエスト復刊、第8刷、1991年）も参照。
- 18) 琵琶湖の別称が「鳩海（にほのうみ）」であることはよく知られている。長く水中に潜っていることから、琵琶湖に注ぐ息長川（現・天野川）の枕詞として「鳩鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ言つきめやも」（『万葉集』巻20）があるが、この川の位置（場所）については近江説と河内説があり、未だに決着を見ていない。

- 19) 芭蕉の無常観に対しては、じつにおびたらしい言及がある。宗教的な存在論から論じた近年の成果として、たとえば田畑邦治「松尾芭蕉：無常観の生涯とその思想」（『白百合女子大学キリスト教文化研究論集』16、2015年）がある。
- 20) 田中善信『芭蕉一俳聖の実像を探る（新典社新書）』（新典社、2008年）、今栄蔵『芭蕉年譜大成』（角川書店、1994年）などを参照。以下、年次に関しては同様。
- 21) 芭蕉と寿貞とのかかわりに関しては、沼波瓊音「芭蕉に妾あり」（『俳味』3巻1号、1912年）が風律の「寿貞は翁の若き時の妾にて、疾く尼となりしなり。次郎兵衛もつかひ申され候よし」（『こばなし』）云々という言及を紹介して以来、さまざまに議論の対象とされてきたが、明確な結論は出されていない。岡本健三『芭蕉と寿貞尼』（芭蕉俳句会、1956年）など参照。
- 22) 古来中国では「登高」と呼んで、この日に高いところに登ることが徳とされた。『続齊諧記』によれば、後漢の桓景と費長房の逸話にもとづく道教由来の風習である。日本では、王維の漢詩「九月九日憶山東兄弟」の一節「遙知兄弟登高處」によって流布したと思われる。芭蕉に長寿と健康を願う動機があったと言わなければならない。ちなみに『奥の細道』山中温泉の条では、芭蕉は重陽に菊酒の句を詠んでいる。「草の戸や日暮れてくれし菊の酒」「山中や菊はたおらぬ湯の句」。今や、芭蕉は菊酒を嗜む余裕すら持てなかったことを類推させる。
- 23) 芭蕉の当日の経路は、既述の通り記録がない。以上は、当代の地図などを参照しつつ、推定したものである。
- 24) 拙稿「河内の近世—中河内を中心に—」（『大阪商業大学論集』第10巻第4号、通号174号、2014年7月）参照。
- 25) 注20)の『芭蕉年譜大成』など参照。
- 26) 『花屋日記』（岩波文庫）参照。
- 27) この句が初出する『笈日記』の表記は「旅に病て夢は枯野をかけ廻」であり、「病て」が「やみて」か「やんで」か、また「かけ廻」が「かけめぐる」か「かけまわる」かは不詳である。ここでは音律を優先して、最も一般に通用している「旅に病(やん)で夢は枯野をかけ廻る」と読んでおきたい。同句は芭蕉逝去翌年の元禄8年(1695)成『笈日記』（各務支考編）に載る。
- 28) 其角の「枯尾花」（元禄7年刊）上巻「芭蕉翁終焉記」には、「ただ壁をへだてて命運を祈る声の耳に入りけるにや、心細き夢のさめたるはとて、旅に病て夢は枯野をかけ廻る。また、枯野を廻るゆめ心、ともせばやともうされしが、是さへ妄執ながら、風雅の上に死ん身身の道を切に思ふ也、と悔まれし。八日の夜の吟なり」と記す。
- 29) 支考・維然坊・又右衛門・次郎兵衛という4名の同行者の性向や、芭蕉との関わりから、どのような移動が選ばれたかを知ること間接的な傍証となる。後考に俟たい。
- 30) 「土地への挨拶」は「名所への敬意」と言い換えることができる。
- 31) 「河内イメージの形成と展開」（『河内文化のおもちゃ箱』批評社、2009年）に少しく触れた。別稿を期したい。
- 32) 注7)の杉山三記雄『暗越奈良街道を歩いた旅人たち（河内の街道を歩く4）』（読書館、2017年）を参照。
- 33) 現在の名称は、「大阪府道・奈良県道702号大阪枚岡奈良線」。それらを南北に画してきたのは昭和11年に旧街道の道筋を踏襲しながら、しかし旧道とは一線を画し、ほぼ一直線に大阪市内まで整備された府道大阪枚岡奈良線（通称「産業道路」）である。
- 34) HP「“どーなってる?!” 東大阪」より「旧大和川 吉田川跡を歩く 花園駅前から今米・川中邸まで」
http://www.do-natteruno.com/con_c/c218/c218.html
- 35) 意岐部と息長については、中九兵衛氏の諸著に論がある。
- 36) 恩智川（おんちがわ・おんじがわ）では、江戸時代初期の慶安年間（1648～52年）に河内国で最初に架けられた橋として知られる「とくさ（木賊）橋」が有名である。のちに石橋となるのは明治3年（1780）のことであったが、古くから木製の橋が架けられていたことをうかがわせる。奈良街道よりやや北側に当たる。拙監修『東大阪今昔写真帖』（郷土出版社、2007年）p.99参照。「八百八橋」の名で知られる大阪（大坂三郷＝市街地）ではあるが、すでに元禄年代には河内平野でも何本もの川に橋が架けられていた。大坂の橋については周知のように公儀の設置（公儀橋）が少なく、わずかに12とも20余りにとどまるともいう。それに対して、三郷だけで10倍（200）以上の橋が民間によって整備・管理されていた。一方、河内の河川に架けられた橋は、後年の資料ではあるが『河内名所図会』に描かれたものが信頼できる。
- 37) 大阪府中河内郡役所編『中河内郡誌』（中河内郡役所、1923年。名著出版復刻版、1972年）参照。以下、松原宿に関しては、主に同書に拠る。
- 38) 資材置き場などを昭和初年に競馬場に転用したが、直後に日本最初のラグビー専用競技場となった。拙稿「花

- 園競馬場をめぐる断想－近鉄・万博・ラグビー場』（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』12、2010年）参照。
- 39) 注37) に同じ。以下同様。
- 40) 木村茂光・吉井敏幸『街道の日本史34奈良と伊勢街道』（吉川弘文館、2004年）参照。また、本田隆成・酒井一『街道の日本史30東海道と伊勢湾』（吉川弘文館、2004年）など、主に『街道の日本史』の当該巻による。
- 41) ただし、大政奉還時には豊浦村は旗本領。『旧高田領取調帳』国立歴史民俗博物館データベース参照。
- 42) 注24) の拙稿「河内の近世」参照。
- 43) 番馬とは、荷主が馬を選べないように、荷物を運ぶ馬子のほうで番（番号）をつけたことに始まり、荷馬の名称として用いられた。『歴史民俗用語辞典』（日外アソシエーツ）など参照。なお、注7) の『わが郷土松原雑記』は「常時人員50人、馬50匹」（6頁）とするが、出典明記がなく、従いにくい。
- 44) 『静岡県志太郡志』によれば、東海道の島田宿は、享和3年（1803）に350人（『宿明細帳』）、天保14年（1843）に482人（『宿村大概帳』）、嘉永年間（1848～54）には647人に達した。人足数は到底定足数の100人にはとどまらず、幕末に近づくにつれて急増している。ここから考えても、松原宿の馬と人足も幕末には定数を大きく超えていただろう。ただし、江戸前期における奈良街道の状況を明確に示す史料は管見に入らない。
- 45) 大阪商業大学商業史博物館編『河内国若江郡御厨村加藤家文書』（資料目録第3集・前編、1995年、資料目録第4集・後編、1997年）
- 46) 『日本国語大辞典（第二版）』（小学館、2003年）参照。
- 47) 「ほんまに（本当に）」という大阪弁（関西弁）の由来は古典語（京詞）「ほんに」とされることも多いが、この「本馬」が関与している可能性が考えられる。
- 48) 近世（江戸時代）が訴訟社会であったことは、近年広く知られるようになった。高橋敏『江戸の訴訟－御宿村一件顛末－（岩波新書）』（岩波書店、1996年）、渡辺尚志『百姓の主張－訴訟と和解の江戸時代』（柏書房、2009年）など。
- 49) ウェブサイト「なんでも東大阪」<http://nandemo-japan.com/osaka/city-higashiosaka/>
- 50) 維新が成立したため、すなわち新しい時代となったから明治に改元したのではない。しかし、孝明天皇によるこの改元が、結果的に新しい時代を告げるひとつの指標となったことは確かである。
- 51) 東大阪市史編纂室編『東大阪市史（近代1）』（東大阪市、1973年）など参照。逆に言えば、この折の22ヶ村の範囲が（一旦は布施市・河内市・枚岡市の3市に分かれたが）、のちの東大阪市の範囲に何らかの影響を及ぼしたとも考えられる。市域策定に関しては、拙稿「河内論序説－その地勢・風土と精神世界－」（『大阪商業大学論集』第2巻第4号、通号144号、2007年）にて少しく論じた。
- 52) 若江郡・河内郡の制定を1度目と数えるならば、2度目ということになるだろう。ただし、福万寺は八尾市（東大阪市の南隣）、上之島は福万寺のさらに南に位置しており、現在の東大阪の市域には入らない。
- 53) 『御触書寛保集成』正徳3年（1713）に「軽尻下荷五貫目」と見え、約19kgまで手荷物載せることができた。
- 54) 「くらがりがり登る」も、そのままとれば奈良側の情景である。この句を掲載した句集『菊の香』には前書きがあって「くらがりがり峠にて」としているが、芭蕉生前の書簡や記録等の中には一切出てこず、没後100年以上を経て編まれた句集『菊の香』に初出する発句であることを考えれば、芭蕉が付した可能性は極めて低い。
- 55) 其角の「芭蕉翁終焉記」（『枯尾花』）前詞に「病中吟」とある通り、芭蕉没当時には「辞世」とされてはいなかった。
- 56) 『古事記』『日本書紀』による限り、奈良盆地の東辺を三輪（大神神社）から天理（石上神宮）へと南北につなぐ「山辺の道」（現在の「山の辺の道」）が日本最古の道と言われている。また、最古の官道としては、難波と飛鳥を結ぶ竹内街道（大道）が知られている（『日本書紀』）。ただし、人間の生活の痕跡から見て、生駒西麓を南北につなぐ海沿い道は、それらの道よりも古い可能性がある。ただ、そうであれば、現在のところ日本最古の人類とされる36,000～32,000年前の山下洞人（那覇市）の歩いた道が日本最古の道ということになるわけだが。
- 57) 上方史蹟散策の会『東高野街道（上・下）』（向陽書房、1900・1901年）、杉山三記雄『東高野街道（河内の街道を歩く1）』（読書館、2014年）、コミュニティ＆コミュニケーション編『東高野街道－いまに生きる河内の古道（歴史の道シリーズ3）』（環境文化研究所、1982年）など参照。
- 58) 松尾耕三『河内名流伝 下巻』（松尾耕三、1894年）、小野利教編『伴林光平全集 上・下』（湯川明文堂、1919年）など参照。

- 59) 川中家（東大阪市今米）所蔵資料参照。
- 60) 拙稿「振売喧嘩の意味論 ―「野崎参り」考証一斑―」（『大阪春秋』第160号、特集：大東―この地はかつて〈首都〉であった、2015年10月）。
- 61) 注5)の『枚岡市史』など参照。
- 62) 杉山三記雄氏の「河内の街道を歩く」シリーズ（1「東高野街道」2014年11月、2「俊徳街道・十三街道」2014年12月、3「大坂の陣と戦の街道」2015年12月、4「暗越奈良街道を歩いた旅人たち」2017年3月、5「古堤街道」2020年2月）は、その観点においても貴重な試みである。
- 63) 深江は大正末年以降大阪市に編入（合併）されて現在に至るため、東大阪市の市史等で論じられることがない。以下（第4章）で述べるように、本稿ではここも旧中河内郡内ということで東大阪市（旧布施市）に連続する地域として考察に含める。
- 64) 枚岡（平岡）神社に関しては、注5)の『枚岡市史』など参照。
- 65) 河内国一之宮枚岡神社公式ウェブログ「枚岡神社だより」2010年10月9日「枚岡山湧水」による。
<https://blog.goo.ne.jp/shinkimichimichi/e/f4a53c307683ca4a798a36994d9b803d>
- 66) 図3「街道歩きの旅」参照。<https://kaidoaruki.com/area-kinki/kuragarigoenarakaido/>
- 67) 『日本歴史地名大系30 奈良県の地名』（平凡社、1981年）
- 68) 貝原益軒「南遊紀行（南遊記事）」（『諸国巡検記』日新書屋、嘉永6年〔1853〕刊）に、付替え直前のこの地域の様子が記録されている。
- 69) なお、芭蕉の句を1日でも朗誦しなければ口からイバラが生えたとまで言い切った芭蕉信奉者の与謝蕪村が、この街道にやってきたのは（蕪村は遠慮したのか記していないが）間違いなく芭蕉の面影を慕ってのことであったと考えられる。その後建てられた句碑が新喜多中学校に、新喜多橋の親柱とともに現存する。拙稿「蕪村と河内」（『都大論究』53、2016年6月）。大和川水系の主流、長瀬川に架けられた橋である。
- 70) 注36) 参照。渡船の回数が多ければ、馬はもちろん、駕籠の使用も控えられたものと考えられる。
- 71) ただし、絵師は異なっていて、前者の丹羽桃溪に対して後者は竹原春朝斎が挿絵を描いている。
- 72) 『デジタル大辞泉』参照。
- 73) ただし、西鶴の浮世草子にはデフォルメも多く、もとよりフィクションであって、必ずしもそれが当時の実態であった証拠にはならない。
- 74) 注73) に同じ。
- 75) 今栄蔵『芭蕉年譜大成（新装版）』（角川学芸出版、2005年）参照。
- 76) 拙稿「競馬文学論序説」（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第14号、2012年）。順不同で掲げておく。道のべの木樨は馬にくはれけり、冬の日や馬上に氷る影法師、蚤虱馬の尿する枕もと、馬をさへながむる雪の朝かな、野を横に馬牽むけよほととぎす、馬に寝て残夢月遠し茶の烟、柴附し馬のもどりや田植樽など。
- 77) 他に『河内名所図会』には「棕ガ嶺」に由来しているという説が記され、現在最も優勢である「樹木が生い茂って昼なお暗い」という説は記されていない。わざわざ記すまでもないと考えたのか、説として却下したのか、あるいは単に書き落としただけなのかはわからない。逆に、芭蕉の句から「鞍借り」という地名起源説が始まった可能性すらあると考えている。以下に見るように、この地域においても芭蕉は長く敬慕され続け、その中心に「くらがり登る」の句があった。芭蕉が赴いた先々で、その事蹟が語られ続けることによって地名伝承が発生する例は少なくない。なお、芭蕉句の解釈については、別稿を用意している。ただし、芭蕉が「河内」という国名を用いた事例を知らない。
- 78) 紀行文を書いた5回の旅だけで、全行程が6500キロに及んだという試算がある。NHK BSプレミアム『偉人たちの健康診断』2019年5月16日「松尾芭蕉 危険な“いびき”対処法」。
- 79) 東大阪市教育委員会編『東大阪市の石造物』1（わが街再発見1、1995年）、2（わが街再発見2 中地域、1997年）、3（わが街再発見3 東地域、1999年）など。
- 80) 注51)の東大阪市史編纂室編『東大阪市史（近代1）』（東大阪市、1973年）及び『東大阪市史（近代2）』（東大阪市、1997年）を参照。
- 81) 注36) に同じ。
- 82) 大坂城の石垣としても利用された花崗岩。石質が硬質で、加工に適している。庭石や手水鉢などに用いられたが、現在、加工された生駒石の多くは石灯籠として存在している。

- 83) 注79)『東大阪市の石造物』など参照。
- 84) 枚岡神社境内には、白水井の脇に享和2年の年記を有する「永代献納」と刻された石灯籠が立つ。献納者は「大坂書林」云々とあって、『河内名所図会』版行、そしておそらく売れ行き的好調を謝して献納されたものである。参照：web「平岡神社だより」2010年10月30日、ある「灯籠」のこと
<https://blog.goo.ne.jp/shinkimichimichi/e/1d9354dd192d0bf8a571d1da194a756e>
- 85) 他に「くらがり」の名を持つ地名として、愛知県岡崎市に「くらがり溪谷」がある。豊橋市より約40キロ、豊川市より約30キロ北に当たる。新城市との市境に近く、本宮山（標高789メートル）から北に伸びる尾根の西側の溪谷に、この名が付けられている。「暗峠」は、いかにそこが賑わっていたかということよりも、『河内名所図会』に描かれるその場所が全く以て平地であるかのような趣を呈していることに注目したい。その後、複数の料亭・温泉旅館が営業して、3つの少女歌劇が覇を競い、日本最初の鋼索鉄道（ケーブルカー）が設置され、山稜には日本最初のスカイラインが敷設されるなど、山頂をはじめ生駒山は実際に関西を代表する観光地となった。拙稿「花園競馬場をめぐる断想—近鉄・万博・ラグビー場—」（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』12、2010年6月）同「生駒山の位相（トポロジー）—アミューズメントエリア形成の前提として—」（同18、2016年6月）参照。
- 86) 暗峠に設置された案内板（暗越奈良街道と暗峠、平成16年3月、東大阪市）を撮影。
- 87) 注12)の『芭蕉書簡集』参照。
- 88) 以下、日の出・日の入り等の時刻は、サイト「こよみのページ」参照。最終更新日02/16/2020 06:29:02
http://koyomi.vis.ne.jp/directjp.cgi?http://koyomi.vis.ne.jp/reki_doc/doc_0501.htm65
- 89) 『笈日記』（春陽堂、1926年）など。
- 90) こよみのページ「月出没時刻・方位角計算のページ」参照
http://koyomi.vis.ne.jp/directjp.cgi?http://koyomi.vis.ne.jp/reki_doc/doc_0501.htm
 ただし、大坂から見た月は、この日芭蕉が越えてきた生駒山によって遮られ、実際の月の出時刻は10分余り遅れる。
- 91) 豊浦という地名の由来は、注24)の「河内の近世」にて少しく論じた。
- 92) 枚岡神社は、本来、饒速日命（ニギハヤヒノミコト）が降臨したとされる「^{たけるがみね}峰
- ミネからクラガネへの転訛は音韻的に難しいが、意によって付言しておくこととする。
- 93) 注5)の『枚岡市史』506～508頁参照。
- 94) 他には、翁忌、桃青忌、芭蕉忌などの名称がある。
- 95) 赤羽学「『野晒紀行』の桑名の条の成立」（『俳文藝』第35号初出、『続芭蕉俳諧の精神』清水弘文堂、1984年所収）
- 96) 『東大阪市文化財ガイドブック』（東大阪市教育委員会、1999年）
- 97) 東大阪市史編纂委員会編『河内六郷社句集（史料集1）』（東大阪市、1968年）
- 98) 『なにわ人物誌』（大阪歴史博物館、2008年）
- 99) 三善貞司「なにわ人物伝 平瀬露香（下）」（『大阪日日新聞』2009年12月5日）
- 100) 井上正雄『大阪府全志』巻之四（大阪府全志発行所、1922年。清文堂出版復刻版、1985年）参照。
- 101) 『大阪春秋』第156号、特集：河内人の足あと（新風書房、2014年9月）参照。
- 102) 注24)の拙稿「河内の近世」参照。
- 103) 北隣の大東市には数基の芭蕉句碑が現存する。そもそも、大阪府に建てられた芭蕉碑は、非常に少ないことで知られている。
- 104) 『鹿男あをによし』（幻冬舎、2007年）。第137回直木賞候補。
- 105) 生駒山系歴史文化研究会、大阪府みどり公社編『生駒山—歴史・文化・自然にふれる』（ナカニシヤ出版、2010年）、拙稿「生駒山の位相」（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第18号、2016年6月）参照。
- 106) 注7)の杉山三記雄氏『暗越奈良街道を歩いた旅人たち（河内の街道を歩く4）』を参照。
- 107) 高橋庄次『芭蕉庵桃青の生涯』（春秋社、1993年）など参照。

〔主要参考文献〕

- 大阪府中河内郡役所編『中河内郡誌』中河内郡役所、1923年
勝峯晋風『日本俳書大系 3 蕉門俳諧後集』日本俳書大系刊行会、1926年
立命館大学地理学同好会編『生駒山脈 その地理と歴史を語る』積善館、1944年
藤岡謙二郎編『生駒山地の人文地理』大阪教育図書、1961年
枚岡市史編纂委員会編『枚岡市史』第3巻、枚岡市、1965年
東大阪市史編纂室編『東大阪市史（近代1）』東大阪市、1973年
『角川日本地名大辞典27大阪府』角川書店、1983年
上方史蹟散策の会『東高野街道（上・下）』向陽書房、1900・1901年
東大阪市教育委員会編『東大阪市の石造物1』わが街再発見1、1995年
東大阪市教育委員会編『東大阪市の石造物2』わが街再発見2 中地域、1997年
東大阪市教育委員会編『東大阪市の石造物3』わが街再発見3 東地域、1999年
東大阪市史編纂室編『東大阪市史（近代2）』東大阪市、1997年
藤井直正『郷土史のたのしみ』東大阪市文化財協会、1997年
『東大阪市文化財ガイドブック』東大阪市教育委員会、1999年
今栄歳『芭蕉年譜大成（新装版）』角川学芸出版、2005年
村田路人『街道の日本史33摂津・河内・和泉』吉川弘文館、2006年
東大阪市松原史談会編集委員会『東大阪市松原の歴史（第一次）年表（改訂版）』東大阪市松原史談会、2007年
上田恵美子・金谷一郎他『暗越奈良街道ガイドブック2012』読書館、2010年
生駒山系歴史文化研究会、大阪府みどり公社編『生駒山―歴史・文化・自然にふれる』ナカニシヤ出版、2010年
杉山三記雄『東高野街道（河内の街道を歩く1）』読書館、2014年他